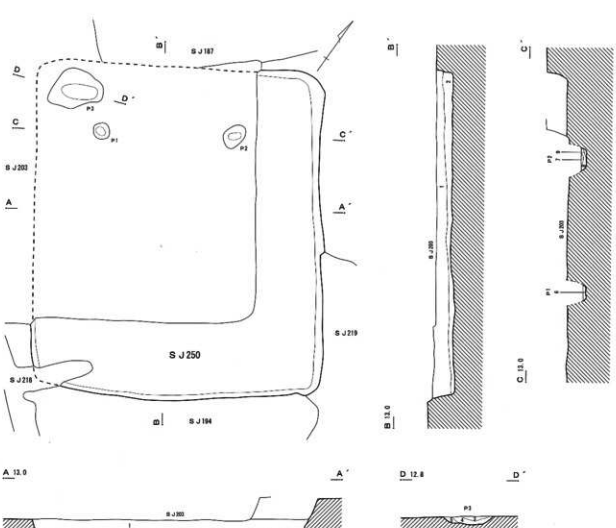


第292図　第250号住居跡

第116・251号住居跡を切り、第256号住居跡、第15号溝跡に切られている。

平面形は長方形を呈する。規模は東西3.70m、南北4.10m、確認面からの深さ0.22mを測る。主軸方向はN－85°－Eを指す。

カマドは確認されていない。

カマド以外の施設としては、周壁溝とピット1基が検出された。

周壁溝は、北壁から東壁にかけて巡っており、検出された範囲内での規模は、長さ420cm、幅10～18cm、床面からの深さ5～12cmである。

ピットは、床面精査の時点では検出できず、床面から23cm掘り下げた段階で確認されたものである。

P1は、円形で長径38×短径35cm、床面からの深さ46cmである。住居跡中央には、焼土や炭が分布しているのが確認された。

図化し得た遺物は、土師器坏・鉢の計2点であった。2は、土器全体に、炭化物が付着した状態で検出された。

遺物の時期は、6世紀第Ⅲ四半期と考えられる。

第293図　第250号住居跡出土遺物

第120表　第250号住居跡出土遺物観察表（第293図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	甕	(18.8)	13.8	－	200.2	10	佐野	雲、角、針	普通	橙		
2	土師器	甑か	(23.0)	14.7	－	465.1	20	群東	雲、針	普通	にぶい黄	外面黒斑	

土層断面の観察から、本住居跡を切っていることが明白な第256号住居跡の出土遺物は、6世紀第Ⅱ四半期と考えられ、時期的に逆転している。この点については、第256号住居跡の土器はカマド内からの出土であるのに対し、本住居跡の土師器甕が、覆土上層からの出土であるためであると推測される。

第253号住居跡（第300・301図）

調査区中央北西寄り、F－3グリッドに位置し、流路跡堆積層に掘りこまれる。他遺構との重複関係は認められなかった。

平面形は長方形で、規模は東西4.10m、南北3.08m、確認面からの深さ0.38mを測る。カマドと、住居本体の方位には若干の相違があり、カマドはS－76°－E、住居本体はS－83°－Eを指す。

カマドは、北壁中央に設けられている。掘方に、地山土混じりの、灰白色粘質土が充填されているのが確認された（アミ部分）。そしてカマド掘方には、煙道部を囲むように、幅15～41cm程の規模で充填されていた。但し、カマド掘方底面での、充填土の厚さについては不明である。袖部は両袖ともが確認されている。カマド袖の、住居壁面からの残存規模は、左袖が42cm、右袖が48cmである。燃焼部底面は、床面との高低差が3～5cmで、浅い皿状を呈し、僅かな稜線を経て煙道部に続く。煙道部底面は、数cm程の窪みを呈して、緩やかな傾斜を示す煙出し部へと続いていく。燃焼部は、住居の壁面にまで及ばないタイプで、底面の平面規模は45×65cmを測る。燃焼部と煙道部を合わせた長さは218cmである。煙道部の幅は28～35cmで、確認面からの深さは7cmを測る。焚口部から南壁面にかけて、さらに住居中央にかけて、炭化物が分布しているのが認められた。また、西壁面手前にも、疎らではあるが炭化物が散っていた。

本住居跡は、僅かな焼土の存在からカマドを仮定し、住居跡の存在を想定した。次いで、東・南壁面を識別して精査を開始した。その結果、カマドの袖部と思われる粘質土が検出された。そして、記述のように、炭化物が水平に分布している状況が確認されたことにより、住居跡の床面であると判断した。カマドの被熱による赤色硬化は、きわめて弱いものであった。また、炭化物の分布から床面と判断できたが、床面自体の硬化はきわめて弱いものであった。

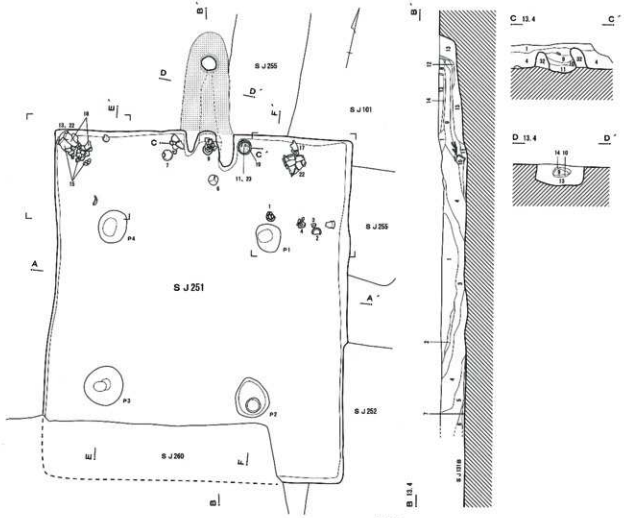
カマド以外の施設は、検出されなかった。

遺物は西壁付近から出土している。その内、図化し得た遺物は、土師器坏7点であった。

遺物の時期は、6世紀第Ⅳ四半期と考えられる。

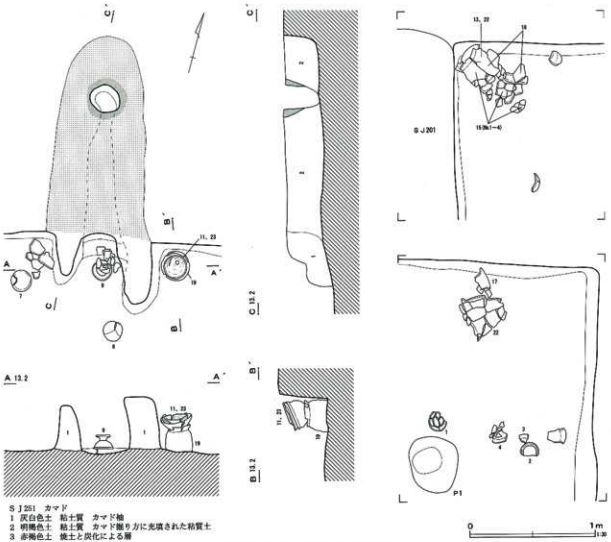
第255号住居跡（第302・303図）

調査区北東部、G－7グリッドに位置する。第251



S J 251
1 明灰色土　砂質　焼土ブロック少量　炭化物多量
2 暗灰色土　砂質　焼土粒子少量　炭化物多量
3 黄褐色土　砂質　焼土ブロック・炭化物少量
4 黄褐色土　砂質　焼土ブロック少量
5 灰褐色土　砂質
6 暗灰褐色土　砂質
7 黒色土　炭化物集積層
8 灰褐色土　砂質　炭化物少量
9 褐灰色土　焼土ブロック・粒子少量
10 赤褐色土　焼土ブロック層
11 黒色土　炭化物集積層　焼焼部・煙道部
12 赤灰色土　焼土・灰層
13 褐灰色土　粘質土ブロックやや多量　カマド掘り方に充填された粘質土
14 赤褐色土　焼土層（煙道天井）
15 黄褐色土　砂質　焼土粒子極く微量　炭化物少量
16 暗黄褐色土　砂質　炭化物微量
17 暗褐色土　砂質　炭化物少量
18 黄褐色土　砂質　炭化物少量　しまり強
19 明黄色土　砂質　粘質土粒子少量　しまり弱
20 黄褐色土　粘土質　炭化物少量　しまり強
21 明黄褐色土　砂質　炭化物微量
22 暗褐色土　砂質　焼土ブロック・粒子少量　しまり強
23 暗黄褐色土　砂質　焼土粒子微量　炭化物多量　しまり強
24 黄色土　粘土質　しまり弱
25 暗褐色土　砂質　炭化物少量　しまり強
26 黒色土　粘土質　炭化物微量　しまり強
27 暗黄褐色土　砂質　焼土粒子微量　炭化物少量　下位に炭化物層堆積
28 黄褐色土　焼土粒子微量　炭化物少量　軟質
29 暗褐色土　砂質　炭化物少量　しまり強
30 暗褐色土　砂質　粘質土粒子少量　炭化物極く微量　しまり強
31 黒褐色土　粘土質　炭化物極く微量　しまり強
32 灰色土　粘質土ブロック層　カマド袖

第294図　第251号住居跡



第295図　第251号住居跡カマド

号住居跡を切り、第101号住居跡に切られる。

平面形は長方形で、規模は、東西3.64m、南北4.00m、確認面からの深さ0.12mを測る。主軸方向はN－2°－Wを指す。

カマドは、北壁中央に設けられている。袖部は両袖ともが確認されている。カマド袖の、住居壁面からの残存規模は、左袖が64cm、右袖が60cmである。燃焼部底面は、床面との高低差がほとんどなく平坦で、きわめて緩やかな傾斜で、煙道部から煙出し部へと続いていく。燃焼部と煙道部を合わせた長さは113cm、幅は28～35cmで、確認面からの深さは8cmを測る。

遺物は西壁付近から出土している。土師器甑（7）は北西コーナーから、土師器甕（5・6）は住居中央よりやや西寄りの位置から出土した。

図化し得た遺物は、土師器坏・高坏・甕・甑のほか、土玉を合わせ、計9点であった。なお4は、大型高坏の坏部である。

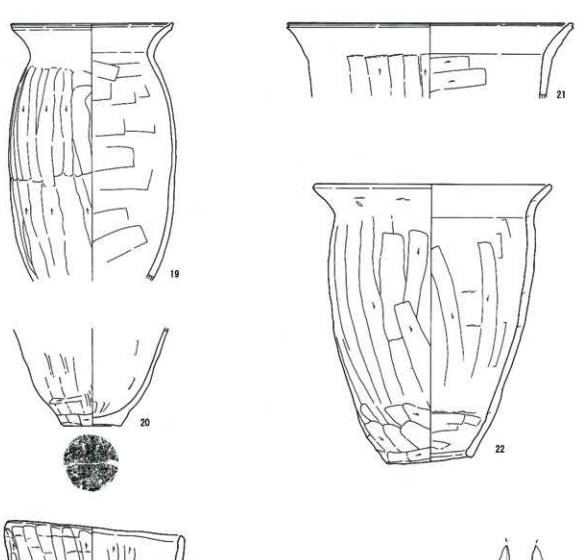
遺物の時期は、6世紀第Ⅰ四半期と考えられる。

第256号住居跡（第299・304図）

調査区北東部、G・H－7グリッドに位置する。遺構の大半は調査区外に続く。第116・252号住居跡を切り、第94号住居跡に切られている。

本住居跡は、コーナー部分が1箇所検出されたのみであるため、遺構の平面形が、方形か長方形かは不明である。検出し得た範囲内での規模は、東西4.17m、南北3.95m、確認面からの深さ0.43mを測る。主軸方向は、N－4°－Eを指す。

第296図　第251号住居跡出土遺物（1）



第297図　第251号住居跡出土遺物（２）

カマドは、北壁に設けられている。袖部は両袖ともが確認され、住居壁面からの残存規模は、左袖が83cm、右袖が68cmである。燃焼部は長さ42cm、幅30cm、床面からの深さは５cmで、浅く窪む。底面は緩やかな傾斜で上り、煙出し部に至る。煙道部は、長さ158cm、幅25cm、確認面からの深さ16cmである。

カマド以外の施設は、検出されなかった。

図化し得た遺物は、土師器甕のほか土玉３点および貝巣穴痕泥岩を含め、計５点であった。

遺物の時期は、６世紀第Ⅱ四半期と考えられる。

土層断面の観察から、本住居跡が切っていることが明白な第252号住居跡の出土遺物は、６世紀第Ⅲ四半期と考えられ、時期的に逆転している。これは、本遺構の土師器甕がカマド内から出土しているのに対し、第252号住居跡出土の２点の土器は、住居跡覆土上層において出土したものであることから生じ

第121表　第251号住居跡出土遺物観察表（第296・297図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	11.8	4.6	－	148.6	95	群東		普通	橙		173-8
2	土師器	坏	12.6	5.2	－	173.2	95	埼北	雲、角、針	普通	橙		173-9
3	土師器	坏	12.4	5.1	－	55.5	20	群東	針	普通	橙		
4	土師器	坏	12.3	4.8	－	100.7	70	群東	角、針	普通	橙		173-10
5	土師器	坏	12.1	4.9	－	153.0	75	埼北		普通	橙		174-1
6	土師器	坏	14.6	5.5	－	276.8	95	栃南	角、針	普通	にぶい黄橙		174-2
7	土師器	坏	14.7	5.3	－	278.3	95	栃南	角、針	普通	にぶい黄橙	カマド左脇	174-3
8	土師器	坏	(12.7)	4.9	－	80.8	35	栃南～茨西	針	普通	橙	口縁に穿孔1ヶ所1.5×1.5	
9	土師器	高坏	13.6	10.0	8.0	394.3	100	栃南	角、針	普通	にぶい黄橙	カマド支脚	191-5
10	土師器	高坏	－	6.3	(8.0)	105.7	25	群東	雲	普通	橙		
11	土師器	鉢	22.6	12.0	7.0	787.1	80	佐野		普通	橙	カマド右脇	191-6
12	土師器	鉢	(22.2)	15.5	6.2	685.2	50	栃南～茨西	角、針	普通	橙		192-1
13	土師器	甕	(18.5)	32.6	(7.6)	1706.8	70	茨西		普通	橙	被熱強	216-3
14	土師器	甕	(18.0)	11.4	－	363.5	40	栃南	角、針	普通	灰褐		192-2
15	土師器	甕	－	20.0	5.7	823.2	40	群馬	雲、角、針	普通	にぶい橙	被熱強	192-3
16	土師器	甕	18.4	8.6	－	121.1	10	埼南	雲、針	普通	にぶい黄橙		
17	土師器	甕	(20.5)	9.3	－	233.4	30	群東	雲、角	普通	にぶい褐		
18	土師器	甕	(15.2)	11.4	－	325.2	20	栃南	雲、角	普通	にぶい橙		192-4
19	土師器	甕	17.1	27.0	－	1375.4	80	茨西	角	普通	にぶい黄橙	カマド右脇	192-5
20	土師器	甕	－	10.4	6.3	271.7	40	茨西	雲	普通	にぶい黄橙		
21	土師器	甑か	30.0	8.0	－	129.8	5	栃南	角、針	普通	橙		
22	土師器	甑	12.4	29.3	(9.2)	2251.9	95	埼北	雲、角	普通	にぶい黄橙		216-4
23	土師器	甑	19.3	13.7	6.8	798.1	95	下総		普通	橙	カマド右脇　歪み大	192-6
24	土製品	甑	長2.4幅3.6厚3.3重24.6				－		角	普通	橙	把手部分	
25	石製品	不明	孔径(0.2)長3.0幅1.25厚0.4重1.8残(40)								オリーブ灰	緑泥片岩製	234-2

第298図　第252号住居跡出土遺物

た結果と推測される。

第257号住居跡（第305図）

調査区の南側、H・I－2・3グリッドに位置する。第169・186・208・220・232号住居跡に切られている。

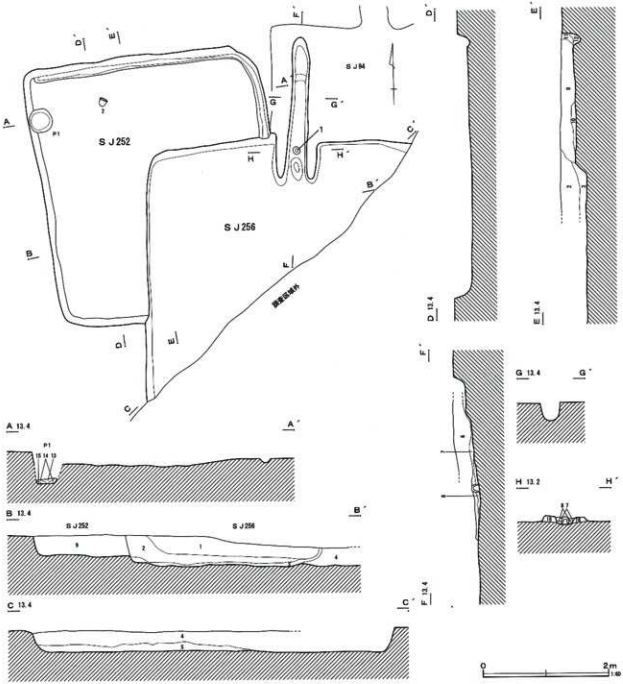
本住居跡は、失われている部分が多いこと、プランに歪みがみられることなどから、平面形・主軸方向は不明である。検出し得た範囲内での規模は、東西4.90m、南北4.75m、確認面からの深さ0.40mを測る。

カマドは、確認されなかった。

カマド以外の施設としては、ピット2基が検出された。P1は、平面図上では第186号住居跡内とな

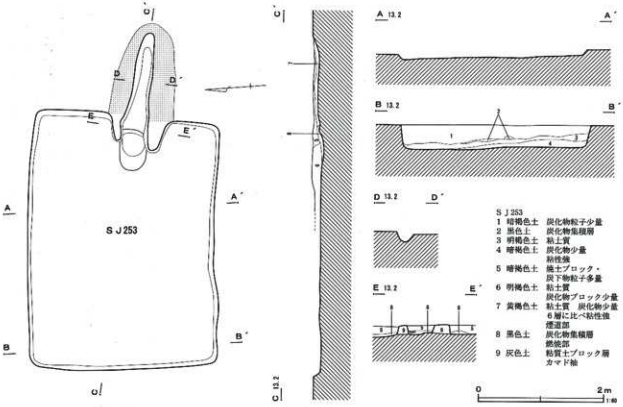
第122表　第252号住居跡出土遺物観察表（第298図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(13.6)	4.4	－	97.2	40	埼北	雲、角	普通	褐灰		174-4
2	土師器	鉢	14.0	12.1	5.6	668.7	100	茨西	雲	普通	にぶい黄橙		193-1

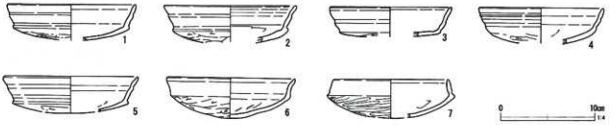


S J 252・256
1 暗褐色土　炭化物ブロック多量
2 明褐色土　炭化物粒子多量　しまり強
3 明褐色土　砂質層　焼土粒子・炭化物粒子多量
4 暗灰褐色土　炭化物少量　粘性強
5 青灰色土　砂質層　炭化物微量　粘性弱
6 明灰白色土　粘土層　しまり強（地山崩落土）
7 赤褐色土　焼土集積層（焼道跡天井崩落土）
8 黒色土　炭化物集積層
9 明褐色土　炭化物粒子多量　しまり強
10 暗褐色土　砂質層　炭化物粒子多量
11 黒色土　炭化物集積層
12 暗褐色土　炭化物少量　周溝
13 暗褐色土　砂質・粘質土粒子少量
14 明褐色土　焼土ブロック・炭化物ブロック少量
15 暗褐色土　炭化物少量
16 灰色土　粘質土ブロック層　カマド袖

第299図　第252・256号住居跡



第300図　第253号住居跡



第301図　第253号住居跡出土遺物

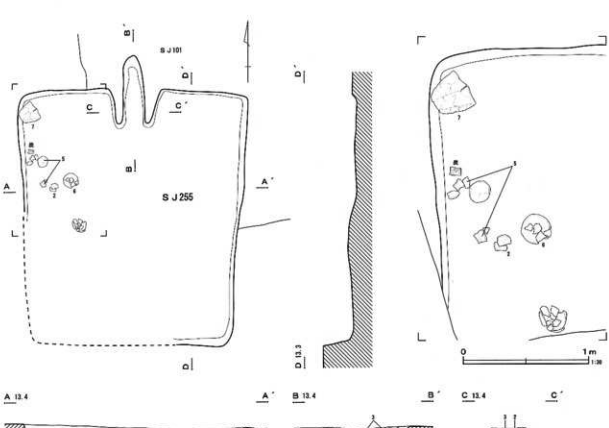
第123表　第253号住居跡出土遺物観察表（第301図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(13.8)	3.9	－	39.1	15	埼北	角	良好	橙		
2	土師器	坏	(14.0)	3.8	－	55.5	35	埼北	雲	良好	黒褐		
3	土師器	坏	(13.0)	3.1	－	31.1	10	埼北	雲、針	普通	褐		
4	土師器	坏	(13.0)	3.7	－	33.2	10	埼北		普通	橙	外面赤彩か	
5	土師器	坏	(14.4)	3.8	－	31.4	20	埼北	雲、角、針	普通	にぶい褐		
6	土師器	坏	(13.6)	4.2	－	103.8	50	埼北		良好	明赤褐		
7	土師器	坏	(12.0)	4.1	－	66.9	20	埼南		普通	橙	カマド　内外面赤彩か	

っているが、第186号住居跡の精査段階では確認されておらず、本住居跡の床面精査時点で検出されたものである。そのため、P1については本住居跡に帰属すると判断した。

P1は楕円形で径28×22cm、床面からの深さ10cm、P2は円形で長径30×短径29cm、床面からの深さ8cmである。

遺物は出土しなかった。



第302図　第255号住居跡

本住居跡を切る、第169・208・220号住居跡の時期は6世紀第Ⅲ四半期、第186号住居跡は6世紀第Ⅳ四半期、第232号住居跡は6世紀である。これらの点から、本住居跡の時期はそれ以前であると推測される。

第258号住居跡（第306図）

調査区南側、I－2グリッドに位置する。第189号住居跡を切り、第188・203号住居跡に切られている。第211号住居跡との関係は不明である。

遺構の大部分が調査区外に続くため、平面形は不明である。検出し得た範囲内での規模は、東西3.40m、南北1.38m、確認面からの深さ0.15mを測る。

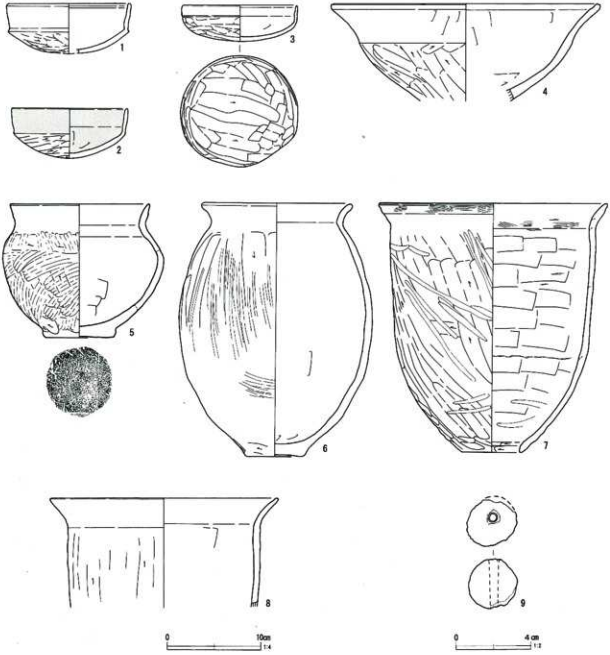
カマドは東壁に設けられており、方位はN－74°－Eを指す。袖部は左袖が残っており、住居壁面からの残存規模は、26cmを測る。燃焼部は、住居壁面より奥にまで及んでいる。燃焼部底面は、緩やかな傾斜で上がり、10cm程の段を経て煙道部に続く。燃焼部の幅は53cmを測る。煙道部は、中ほどに段をもって、比較的急な斜面で煙出し部へと上がっていく。煙道部は、長さ150cm、幅32cm、確認面からの深さ18cmを測る。

遺物は出土しなかった。

本住居跡を切る3軒の住居跡のうち、遺物の時期がもっとも古いのは、第189号住居跡（5世紀第Ⅳ四半期）である。この点から、本住居跡の時期はそれ以前であると推測される。

第259号住居跡（第307図）

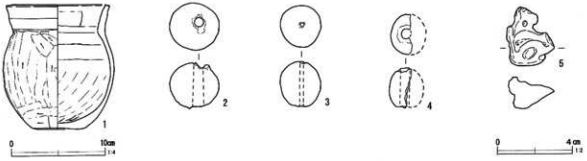
調査区南側、I・J－4・5グリッドに位置する。第181・223・225号住居跡を切り、第221・231・235号住居跡、第37号井戸跡に切られている。



第303図　第255号住居跡出土遺物

第124表　第255号住居跡出土遺物観察表（第303図）

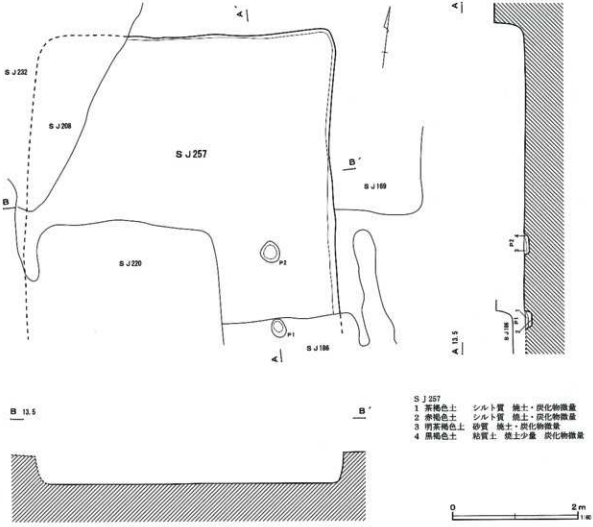
番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(12.8)	5.2	－	44.9	20	埼玉～群馬	角、針	普通	にぶい黄橙		
2	土師器	坏	(12.2)	5.2	－	107.7	45	埼南	雲	普通	浅黄		
3	土師器	坏	12.0	3.8	－	114.9	60	群馬		普通	にぶい橙		
4	土師器	高坏	(28.0)	10.3	－	328.1	30	群東	角	普通	橙		
5	土師器	甕	14.8	14.0	7.4	879.8	75	茨西	角	普通	赤		193－2
6	土師器	甕	(15.7)	26.5	5.8	1091.3	45	群東	雲、針	普通	にぶい黄橙		193－3
7	土師器	甑	(24.2)	26.1	6.4	968.9	40	下北		普通	にぶい黄橙	孔径5.9　大黒斑	217－1
8	土師器	甑か	(24.0)	11.6	－	128.7	5	群東	雲、針	普通	にぶい黄橙		
9	土製品	土玉	径2.7孔径0.5厚2.6重13.7残100						雲	普通	灰黄褐		233－2



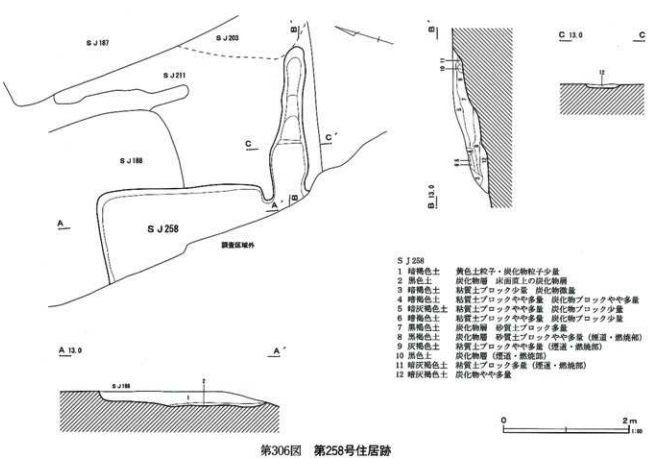
第304図　第256号住居跡出土遺物

第125表　第256号住居跡出土遺物観察表（第304図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	甕	11.0	13.1	5.9	545.4	95	茨西	角	良好	橙		193-4
2	土製品	土玉	径2.6孔径0.5厚2.4重14.4残100						雲	普通	にぶい黄橙		233-2
3	土製品	土玉	径2.2孔径0.2厚2.3重10.0残100						雲	普通	にぶい黄橙		233-2
4	土製品	土玉	径2.2孔径0.5厚2.1重4.2残50						雲	普通	にぶい黄橙		233-1
5	鉄製紡錘		長3.1幅2.4厚1.6重5.9								赤橙	5孔、被熱	238-2



第305図　第257号住居跡



第306図　**第258号住居跡**

平面形はやや歪んだ方形を呈し、規模は東西7.00m、南北7.08m、確認面からの深さ0.30mを測る。住居壁面の方向から、主軸方向はN－84°－W、もしくはN－6°－Eを指すと推測される。本住居跡の中央の床面は、他の部分に較べ硬化が顕著であった。

カマドは確認されていない。

カマド以外の施設としては、ピットが2基検出された。ともに、床面精査の段階では検出されず、床面から7～13cm掘り下げた段階で確認された。

P1は楕円形で長径105×短径60cm、床面からの深さ32cm、P2は円形で長径70×短径68cm、床面からの深さ55cmを測る。

図化し得た遺物はなかった。

本住居跡は、第181・223・225号住居跡（5世紀第Ⅳ～6世紀第Ⅲ四半期）を切り、第221（7世紀第Ⅱ～Ⅲ四半期）・231（7世紀第Ⅰ四半期）・235（7世紀第Ⅱ～Ⅲ四半期）号住居跡に切られていると思われる。この点から本住居跡の時期は、この間に納まると推測される。

第260号住居跡（第308～311図）

調査区東側、G・H－6・7グリッドに位置する。

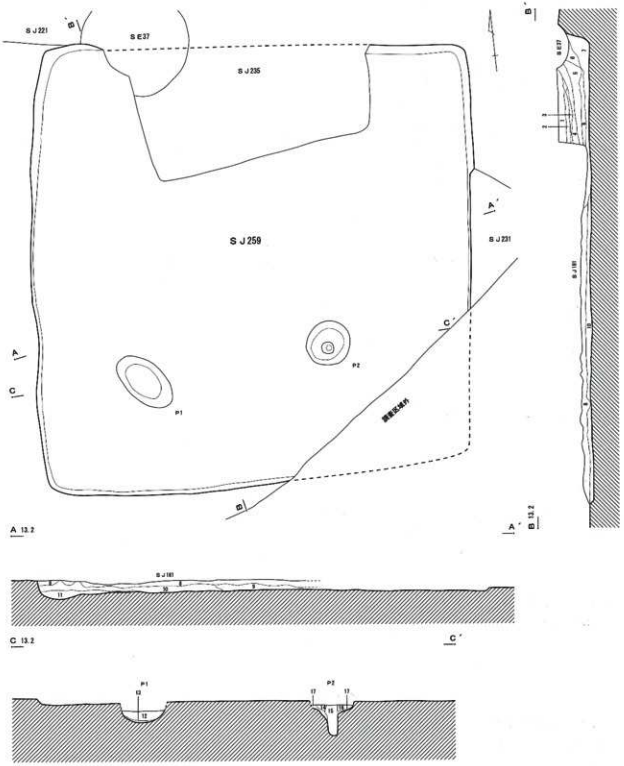
第116・139・201・251号住居跡を切り、第131・146号住居跡、第15号溝跡に切られる

平面形は台形で、規模は東西軸4.69m、南北軸5.05m、確認面からの深さ0.5mである。主軸方向はN－20°－Wを指す。

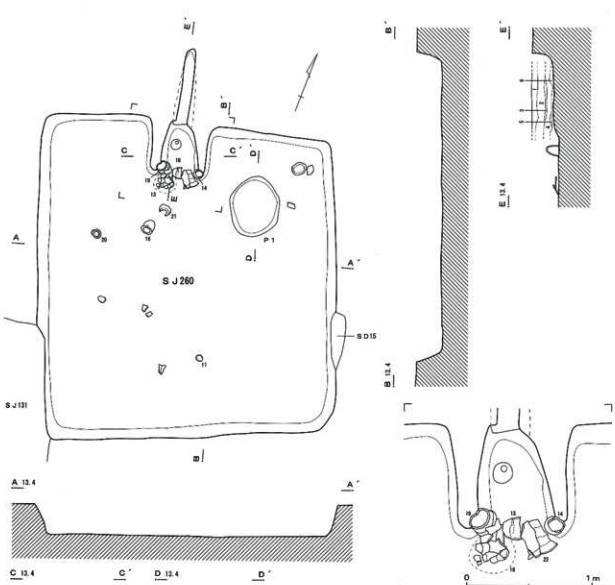
カマドは北壁中央に設けられており、方位はN－12°－Wで、住居跡本体に対してやや東に振れている。袖部は両側ともほとんど流失してしまっていたが、わずかに基部が確認できたこと、また両袖先端には補強材となった土師器甕を確認したことから、カマドの様子がうかがい知れた。

袖構築土には黄灰色粘質土が用いられ、補強材まで含めた壁面からの残存規模は、左袖89cm、右袖88cmで、残存高は10cmに満たない。

右袖は底部を欠いた残存率70%程度の土師器甕（14）が直立しており、左袖は胴部下半を欠いた残



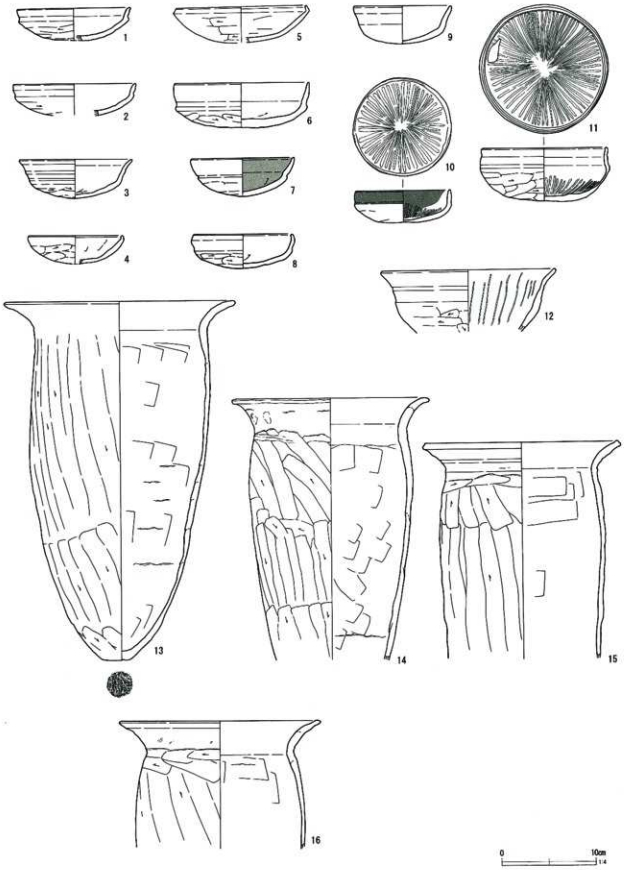
第307図 第259号住居跡



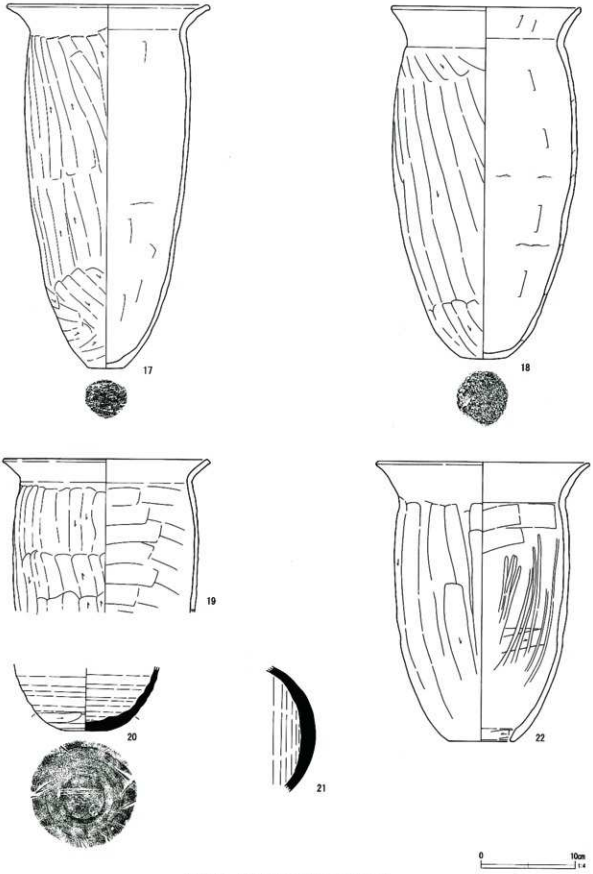
第308図　第260号住居跡

存率20%程度の土師器甕（19）が傾いて検出された。右袖の胴部下半はすぐそばで出土している。補強材の土師器甕は、外側は袖構築土で覆われ器面が見えない。一方で前面や内側には構築土が一切分布せず、また燃焼部内に堆積した灰は補強材の土師器甕に付着していることから、構築時のカマドは、外側を粘土で覆い、前面および内側は補強材が露出していたと推測される。補強材の幅で計測する焚口幅は45cmである。

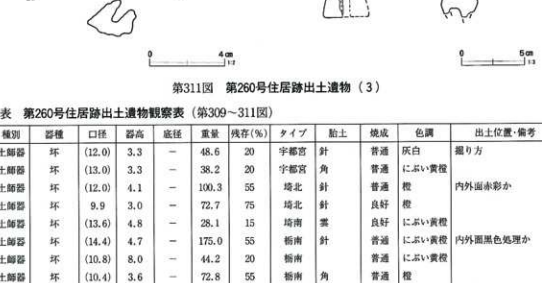
燃焼部は壁内に収まり、底面は床面より僅かに低く掘り窪められる。燃焼部内西寄りの位置では、土師器甕の胴部下半が逆位で出土した。これは支脚に転用されたものと推測される。燃焼部とは10cm程の段差をもって煙道部に接続する。煙道部底面は僅かな凹凸をもって、緩やかに上昇して煙道部へと続いていく。住居壁面から煙出し部までの距離は117cm、



第309図　第260号住居跡出土遺物（1）



第310図　第260号住居跡出土遺物（２）



第311図　第260号住居跡出土遺物（3）

第126表　第260号住居跡出土遺物観察表（第309～311図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(12.0)	3.3	－	48.6	20	宇都宮	針	普通	灰白	縦り方	
2	土師器	坏	(13.0)	3.3	－	38.2	20	宇都宮	角	普通	にぶい黄橙		
3	土師器	坏	(12.0)	4.1	－	100.3	55	埼北	針	普通	橙	内外面赤彩か	
4	土師器	坏	9.9	3.0	－	72.7	75	埼北	針	良好	橙		174-5
5	土師器	坏	(13.6)	4.8	－	28.1	15	埼南	雲	良好	にぶい黄橙		
6	土師器	坏	(14.4)	4.7	－	175.0	55	栃南	針	普通	にぶい黄橙	内外面黒色処理か	174-6
7	土師器	坏	(10.8)	8.0	－	44.2	20	栃南		普通	にぶい黄橙		
8	土師器	坏	(10.4)	3.6	－	72.8	55	栃南	角	普通	橙		
9	土師器	坏	10.4	4.0	－	115.8	95	宇都宮		普通	にぶい黄褐	漆付着か	174-7
10	土師器	坏	10.2	3.3	－	113.2	95	佐野		普通	にぶい黄橙	漆付着	174-8
11	土師器	坏	13.4	5.5	－	192.0	95	佐野	角	普通	褐灰	内外面黒色処理か	174-9
12	土師器	甑か	(18.0)	6.5	－	133.4	10	埼北	雲	普通	橙		
13	土師器	甕	24.3	37.8	2.9	1018.9	90	埼北	雲、角	普通	にぶい黄橙	カマド焚口付近	217-2
14	土師器	甕	(21.0)	27.8	－	1135.4	70	埼北	角、針	良好	赤褐	カマド右袖構築材	193-5
15	土師器	甕	20.5	22.8	－	721.6	30	群東	雲、角、針	普通	橙	カマド　被熱	
16	土師器	甕	21.0	13.5	－	712.4	25	埼北	雲、針		橙		
17	土師器	甕	(21.0)	38.3	3.8	943.8	50	埼北	角、針	普通	にぶい黄橙	炭化物付着	217-3
18	土師器	甕	19.6	37.1	5.0	1531.0	70	埼北	角、針	普通	橙	カマド焚口付近	217-4
19	土師器	甕	(21.5)	16.2	－	409.8	20	栃南	雲	普通	にぶい黄橙	カマド左袖構築材	
20	須恵器	甕	－	7.0	－	318.5	30	湖西		普通	灰白		
21	須恵器	フラスコ瓶	－	13.0	－	298.5	15	湖西	雲、角	普通	灰		193-6
22	土師器	甑	(22.6)	29.4	－	197.7	20	茨西		普通	にぶい黄橙	カマド焚口付近	
23	土製品	土錘	孔径0.1長(1.9)幅1.1厚1.1重2.3残80							普通	明黄褐	カマド	
24	鉄製品		長3.7幅2.6厚1.9重7.9								赤褐	15孔、被熱器	238-2
25	土製品	紡錘車	径(3.6)孔径(0.8)厚2.1重10.0残45						針	普通	灰黄		236-1
26	鉄滓		長(4.3)幅2.9厚(2.1)重10.5										

底面幅は40cmで、確認面からの深さは33cmである。

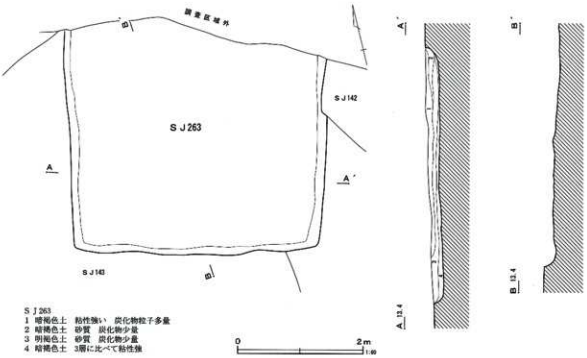
カマド以外の施設としては、北東コーナー付近でピットが確認されている。P1は楕円形で93×78cm、床面からの深さ10cmである。

遺物は、カマド袖部補強材や支脚として土師器甕が出土したほかは、カマド焚口付近、住居跡床面からも比較的多数の土器が出土している。14は右袖補強材、19は左袖補強材である。焚口付近では、土師器甕・甑3個体（13・18・22）が、まとまった状態で出土している。この他にもの、土師器坏（1～11）、土師器甕（13～19）、須恵器フラスコ瓶（21）などが出土している。

遺物の時期は、7世紀第Ⅳ四半期と考えられる。

第262号住居跡（第185・186図）

調査区西側、G－1グリッドに位置する。第182・184・185号住居跡を切っている。南東コーナーの



第312図 第263号住居跡

みの検出のため、平面形と主軸方向については不明である。平面規模・主軸方向は不明である。確認面からの深さは0.25mを測る。

カマドは確認されていない。住居跡南壁に幅10～16cm、床面からの深さ10cmの周溝が検出された。

遺物は出土しなかった。

本住居跡が切っている第182・184号住居跡の時期は、ともに7世紀第Ⅰ四半期である。この点から、本住居跡の時期は、それ以降であると推測される。

第263号住居跡（第312図）

調査区東側、F－8グリッドに位置する。遺構の北側は、調査区域外に続いている。第142・143号住居跡に切られているが、第222号住居跡との新旧関係については不明である。

平面形については、方形であるのか長方形であるかは特定できない。平面規模は、東西は4.15mであるが、南北は3.74mまでの確認である。確認面からの深さは0.22mを測る。主軸方向についてはN－8°－E、またはN－82°－Wを指すと推測される。

カマドおよび、その他の施設は確認されていない。

遺物は出土しなかった。

本住居跡を切っている第143号住居跡の時期は、ともに6世紀第Ⅳ四半期であることから、本住居跡の時期は、それ以前であると推測される。

第273号住居跡（第89図）

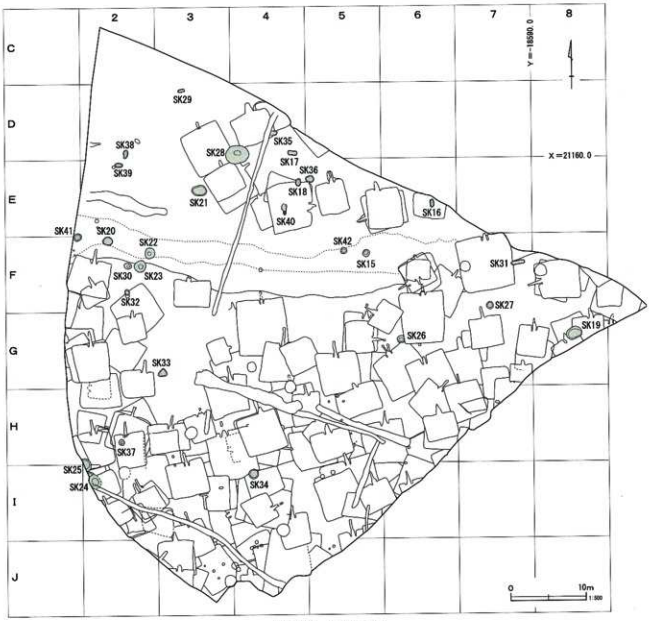
調査区南東側、I－6グリッドに位置する。第97・132・151号住居跡と重複し、新旧関係はいずれの住居跡よりも古い。住居跡の大半は調査区域外におよぶほか、第132号住居跡に大きく床面を壊されており、平面形は不明である。カマドは確認されず、主軸方向は不明であるが、東壁を基準にした方位はN－30°－Wで、確認面からの深さは0.17mである。

出土遺物はなく、時期は特定できないが、5世紀第Ⅳ四半期の第132号住居跡に切られていることから、時期はこれより古いであろう。

2．土坑

第３・４次調査区では、土坑を28基検出した。分布は北側に集中し、流路跡堆積層に掘り込まれたものが多い。多くの土坑は遺物を伴わず時期の特定はできないが、流路跡の堆積が６世紀中～後半頃には完了していることから、時期はこれより下るものと思われる。

土坑には掘り込み縁辺が被熱赤変し、覆土に炭化物や焼土ブロックを多量に含んでいるものが８基確認された。第16・17・18・29・31・36・39・40がこれに該当する。形状は多用であるが、長円形や隅丸長方形など、一方に軸をもつものが多い。出土遺物に乏しく、機能は特定できないが、第18号土坑では羽口や鉄滓が出土している。



第313図　土坑分布図

第15号土坑（第314図）

調査区北寄り、F－5グリッドに位置し、流路跡堆積層に掘り込まれる。平面形は楕円形で、規模は0.95×0.78mである。確認面からの深さは0.36mで断面形は摺鉢状となる。

遺物は土師器甕の小片が数点出土したが、時期の特定はできなかった。しかしながら、流路跡との関係から、時期は6世紀後半以降と思われる。

第16号土坑（第314図）

調査区北側、E－6グリッドに位置し、第144号住居跡の覆土を45cmほど下げた段階で確認した。平面形は長円形で、主軸方向はN－11°－Wである。規模は長軸1.75m、単軸0.80mで、確認面からの深さ0.25mである。掘り込みの縁辺、特に南側が被熱赤変しており、覆土下層には炭化物集積層が二面確認された。

遺物は土師器甕の小片が数点出土しているが、時期の特定できる遺物はなかった。しかしながら、7世紀第Ⅳ四半期の第144号住居跡覆土中に掘り込まれていることから、時期はこれ以降であろう。

第17号土坑（第314・317図）

調査区北側、D－4グリッドに位置し、流路跡第二次堆積層に掘り込まれる。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸1.25m、短軸0.55mである。確認面からの深さは0.16mで、底面はフラットになる。掘り込みの縁辺は被熱しており、覆土に炭化物ブロックや焼土ブロックを多く含み、中層には焼土ブロックの集積が見られる。

遺物は土師器坏の破片が1点出土している。流路跡第二次堆積層中に掘り込まれていることから、時期は6世紀後半以降と思われる。

第18号土坑（第314・317図）

調査区北側、E－4グリッドに位置し、流路跡第二次堆積層に掘り込まれる。第149・154号住居跡と重複し、新旧関係は両住居跡よりも新しい。平面形は南北に長い長円形で、規模は長軸1.02m、短軸0.65mである。確認面からの深さは0.09mで、底面は平坦である。覆土は、炭化物や焼土ブロックを多量に含む暗褐色の砂層が堆積し、底面には炭化物が集積する。

遺物は、炭化物集積層上、あるいは層中より羽口、鉄滓が出土した。羽口は3点出土しており、ともに欠損している。また、2～3cm大の鉄滓が数十点出土したが、図化には至らなかった。これらの鉄滓の総重量は378.9gである。

時期を特定できる遺物の出土はないが、遺構の重複関係からは、8世紀第Ⅰ四半期以降と思われる。

第19号土坑（第314図）

調査区東側、G－8グリッドに位置する。第117、129、215住居跡と重複し、新旧関係はいずれの住居よりも新しい。平面形は楕円形で、規模は2.14×1.50mで、確認面からの深さは0.42mである。底面は中央がもっとも深くなる形状で、覆土には明灰色粘質土が堆積する。

出土遺物は、土師器坏・甕の破片が数点出土したが、時期の特定はできなかった。遺構の重複関係からは8世紀第Ⅲ四半期以降のものと思われる。

第20号土坑（第314図）

調査区北西、E・F－2グリッドに位置し、流路跡堆積層に掘り込まれる。他遺構との重複はない。平面形は楕円形で、規模は1.35×1.15m。確認面からの深さは0.14mで、底面は平坦である。

遺物は出土しておらず時期の特定はできないが、流路跡との関係から6世紀後半以降と思われる。

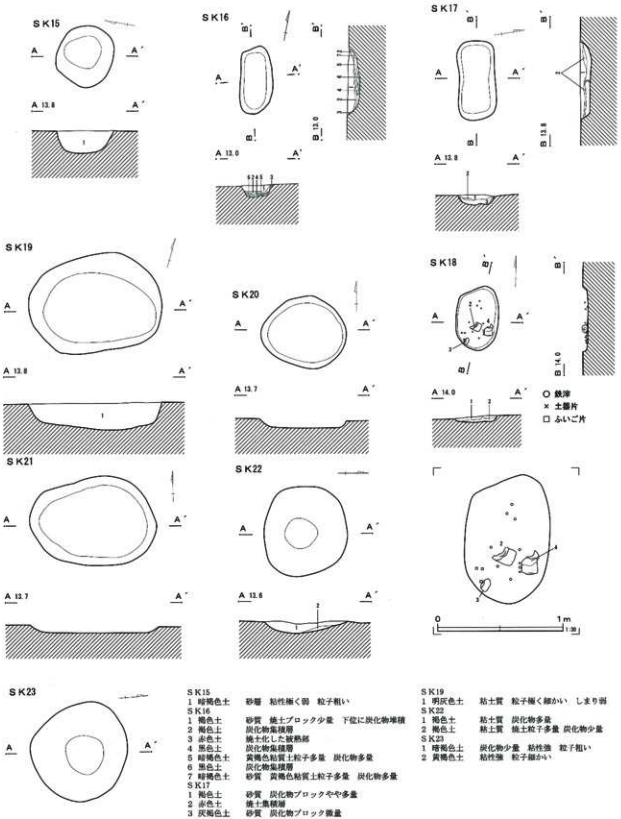
第21号土坑（第314図）

調査区北西、E－3グリッドに位置し、流路跡第二次堆積層に掘り込まれている。平面形は楕円形で、規模は2.05×1.20mで、確認面からの深さは0.12mである。覆土には褐色粗粒砂が堆積している。

遺物は出土していないが、流路跡との関係から、時期は6世紀後半以降と思われる。

第22号土坑（第314図）

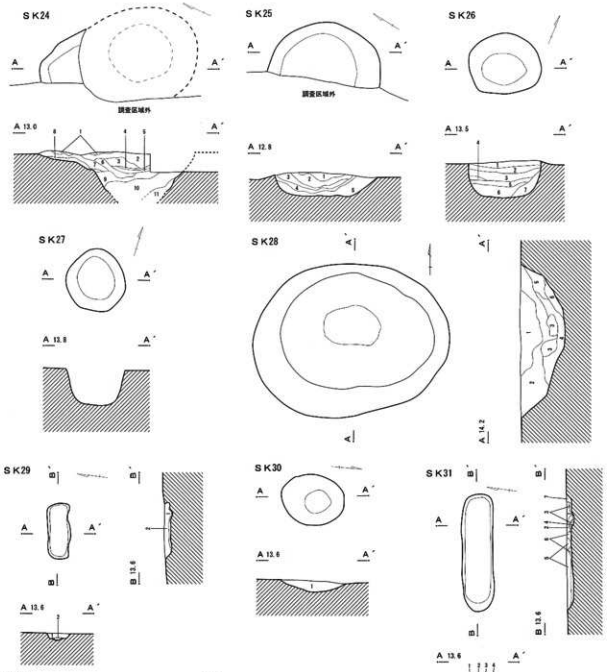
調査区北西、F－2グリッドに位置し、流路跡堆積層に掘り込まれる。平面形は楕円形で、規模は長



SK15
1 暗褐色土　砂質　粘性極く弱　粒子粗い
SK16
1 褐色土　砂質　焼土ブロック少量　下位に炭化物堆積
2 褐色土　炭化物集積層
3 赤色土　焼土化した被熱部
4 黒色土　炭化物集積層
5 暗褐色土　黄褐色粘質土粒子多量　炭化物多量
6 黒色土　炭化物集積層
7 暗褐色土　砂質　黄褐色粘質土粒子多量　炭化物多量
SK17
1 褐色土　砂質　炭化物ブロックやや多量
2 赤色土　焼土集積層
3 灰褐色土　砂質　炭化物ブロック微量
SK18
1 暗褐色土　砂質　焼土・炭化物少量　鉄滓少量
2 黒色土　炭化物集積層
SK19
1 明灰色土　粘土質　粒子極く細かい　しまり弱
SK22
1 褐色土　粘土質　炭化物多量
2 褐色土　粘土質　焼土粒子多量　炭化物少量
SK23
1 暗褐色土　炭化物少量　粘性強　粒子粗い
2 黄褐色土　粘性強　粒子細かい

0　2m
1:40

第314図　土坑（1）



S K24
1 暗赤褐色土　焼土粒子やや多量
　　炭化物多量
2 暗赤褐色土　焼土粒子多量　炭化物少量
3 灰褐色土　焼土粒子・炭化物少量
4 灰褐色土　焼土粒子・炭化物多量
5 暗褐色土　焼土粒子少量
6 黒色土　炭化物集積層
　　焼土ブロックやや多量
7 暗赤褐色土　焼土粒子やや多量
　　炭化物少量
8 暗赤褐色土　焼土粒子やや多量
　　炭化物微量
9 暗灰色土　砂質　炭化物少量
　　焼土粒子やや多量
10 黒灰色土　砂質　炭化物ブロックやや多量
11 灰褐色土　砂質　炭化物微量

S K25
1 暗黄褐色土
2 暗黄褐色土　炭化物極く多量
3 暗黄褐色土
4 暗黄褐色土　炭化物多量
5 暗黄褐色土　焼土粒子・炭化物粒子少量

S K26
1 暗褐色土　焼土・炭化物少量
2 暗褐色土　炭化物少量
　　1層よりしまり弱
3 暗褐色土　2層より粘性強
4 明褐色土　粘性強
5 暗褐色土　砂質　焼土ブロック
　　・炭化物多量
6 明褐色土　焼土・炭化物少量　粘性強
7 黄褐色土　炭化物少量

S K28
1 黒灰色土　シルト質　灰色シルト土多量
2 灰色土　シルト質　砂多量
3 灰色土　灰色粘質土極く多量
　　酸化鉄多量
4 暗灰色土　砂質　砂多量
5 暗褐色土　砂質
6 黒褐色土　砂質

S K29
1 黄褐色土　砂層　炭化物少量　土器片あり
2 茶色土　炭化物集積層
　　炭化物厚52～3cm敷きつめている

S K30
1 砂層　砂質粘土　炭化物少量
　　粘性強　粒子粗い

S K31
1 暗褐色土　砂質　炭化物ブロック少量
2 灰褐色土　砂質　灰色粘土多量
3 黒色土　炭化物集積層
4 暗灰色土　砂質　炭化物多量
5 梅色土　砂質
6 黒色土　炭化物集積層
7 灰褐色土　砂質　炭化物粒子少量

0　2m
1:40

第315図　土坑（2）

径1.40×1.30mである。確認面からの深さは0.14mで、断面形は摺鉢状であり、覆土には褐色粘質土が堆積する。

遺物は出土しておらず時期の特定はできないが流路跡との関係から6世紀後半以降と思われる。

第23号土坑（第314・317図）

調査区西側、F－2グリッドに位置する。

平面形は楕円形で、断面形状は摺鉢状となる。規模は1.60×1.50mで、確認面からの深さは0.25mである。

遺物は土師器坏の破片が4点、土師器甕の破片が数十点出土しているが時期を特定できる遺物が少ない。出土遺物からは6世紀代に位置づけられよう。

第24号土坑（第315図）

調査区南西側、I－2グリッドに位置する。調査区側溝の脇に位置していることから、崩落防止のため確認面から0.60mまで調査し、完掘には至っていない。第196号住居跡、第14号溝跡と重複し、新旧関係は同溝跡よりも古く、第196号住居跡よりも新しい。東側の一部は調査区域外におよんでいる。

平面形は円形土坑の一方が張り出す形状をしているが全容は不明である。円形土坑部は底面が平坦で、張出部の底面は円形土坑部に下降する傾斜を見せる。

規模は推測で長軸2.58m、短軸1.43m、主軸方向はN－24°－Wである。規模・形状から、井戸跡の可能性も考えられる。

遺物は出土しているが時期の特定はできない。他遺構との重複関係から、8世紀第Ⅰ四半期以降、16世紀頃までの所産とおもわれる。

第25号土坑（第315・317図）

調査区南西側、H・I－1・2グリッドに位置する。第165・212・228号住居跡と重複し、新旧関係は第165号住居跡よりも古く、第212・228号住居跡よりも新しい。大半が調査区域外におよんでおり、平面形は不明である。規模は最大部分で1.83m、確認面からの深さ0.37mである。

遺物は土師器坏の破片が少量出土した。時期は、出土遺物から7世紀前半に位置づけられよう。

第26号土坑（第315・317図）

調査区中央東寄り、G－6グリッドに位置する。第113・198号住居跡と重複し、新旧関係は両住居跡よりも新しい。

平面形は楕円形で、底面は平坦で壁際は緩やかに屈曲し、垂直に立ち上がる。規模は1.15×0.95mで、確認面からの深さは0.56mである。

遺物は土師器坏の破片が1点出土している。時期は8世紀前半頃と思われる。

第27号土坑（第315・317図）

調査区東側、F－7グリッドに位置する。

平面形は楕円形で、規模は長径1.00m、短径0.95mで、確認面からの深さは0.55mである。

遺物は土師器坏の破片が少量出土しており、図化し得たのは3点である。12は7世紀後半頃の土師器坏で、内面立ち上がり部分に横方向のミガキを施す。10・11は8世紀前半頃の土師器坏でともに小破片である。出土遺物より時期は、8世紀前半であろう。

第28号土坑（第315図）

調査区北側、D－3・4グリッドに位置し、流路跡第二次堆積層中に掘り込まれる。第111・112・157・160号住居跡と重複し、新旧関係はいずれの住居跡よりも新しい。

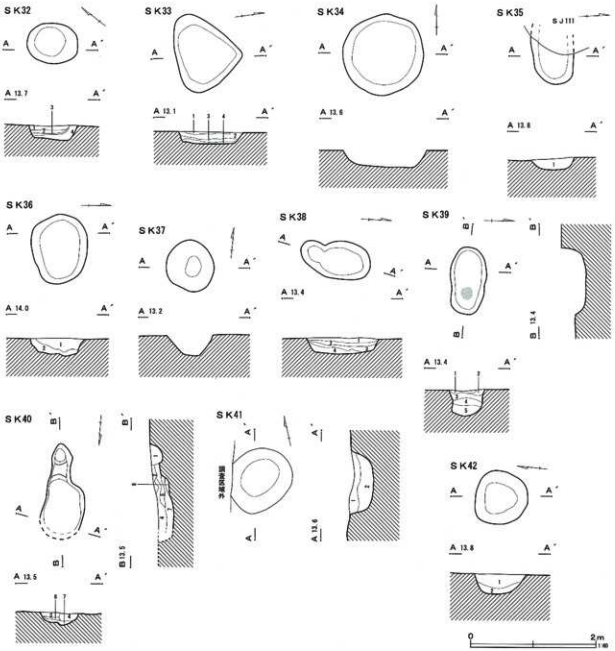
平面形は東西に長い長円形で、規模は長径3.15m、短径2.30mで、確認面からの深さは0.70mである。断面形は、底面中央部分がわずかに平坦となる摺鉢状となる。覆土は下層に地山の崩落した砂層が堆積し、中層以上に、溝跡や井戸跡と似た灰色シルト土が堆積する。3層は酸化鉄を大量に含んでおり、後述する第8号溝跡の覆土と酷似する。

遺物は出土していないが、覆土の様相から時期は中世末頃から近世の所産と思われる。

第29号土坑（第315・317図）

調査区北西、D－3グリッドに位置し、流路跡第二次堆積層に掘り込まれる。

平面形は東西に長い隅丸長方形で、規模は長軸



S K32
1 明褐色土　炭化物微量
2 明褐色土　炭化物多量
3 黒色土　炭化物集積層
4 明褐色土　炭化物少量　粘性強

S K33
1 暗灰褐色土　炭化物粒子多量　しまり強
2 明褐色土　砂質　炭化物微量
3 暗褐色土　砂質　炭化物微量
4 黒色土　炭化物集積層

S K35
1 暗黄褐色土　砂質　黄褐色粘質土ブロック少量
　　炭化物多量

S K36
1 黒色土　炭化物集積層
2 褐色土　砂質　炭化物ブロック多量

S K38
1 褐灰色土　砂層（粗砂砂）
2 黄褐色土　粘土層と砂層の交互堆積
3 黄褐色土　粘質土ブロック層と
　　砂層の交互堆積
4 褐灰色土　砂層（粗砂砂）黄褐色粘質土
　　ブロック少量

S K39
1 明赤褐色土　焼土粒子多量
2 明赤褐色土　焼土粒子やや多量
　　炭化物微量
3 赤褐色土　焼土粒子・焼土ブロック
　　多量　炭化物少量
4 明赤褐色土　焼土粒子やや多量
5 褐灰色土　砂層（粗砂）黄褐色粘質土ブロック少量
　　下位に厚く炭化物集積

S K40
1 灰褐色土　砂質土　炭化物・焼土粒子少量
2 灰褐色土　砂質土　炭化物多量
3 暗赤褐色土　砂質土
4 暗赤褐色土　砂質土　炭化物ブロック少量
　　（天井崩落土か?）
5 暗灰褐色土　砂質土　炭化物・焼土多量
6 灰黒褐層
7 黒灰褐色土　砂質土
　　（炭褐色砂質土層少量混じる）
　　黄褐色粘土ブロック少量
8 灰褐色土　砂質土（上層に灰黒褐層有り）

S K41
1 褐色土　砂質　焼土ブロック少量
2 褐色土　砂質　黄褐色シルト土ブロック多量
　　焼土ブロック少量

S K42
1 暗褐色土　砂層　粘性強く岩　粒子粗い
2 暗褐色土　砂層　粘性弱　粒子粗い

第316図　土坑（3）

0.90m、短軸0.40mで、確認面からの深さは0.12mである。掘り込み周辺は被熱赤変し、底面には炭化物が集積する。

遺物は土師器甕、須恵器高台付坏の破片が出土した。時期は出土遺物から、7世紀後半と思われる。

第30号土坑（第315図）

調査区西側、F－2グリッドに位置する。

平面形は楕円形、断面形は摺鉢状である。規模は長径1.02m、短径0.80mで、確認面からの深さは0.18mである。

遺物は出土しておらず、時期は不明である。

第31号土坑（第315図）

調査区東側、F－7グリッドに位置する。第135号住居跡と重複し、新旧関係は同住居跡よりも新しい。当初カマド掘り方として調査を進めたが、本体部分が確認されないことから、土坑と判断した。

平面形は楕円形、規模は長径1.85m、短径0.50mで、確認面からの深さは0.10mである。底面は平坦で、覆土に炭化物や焼土ブロックを多量に含む。

遺物は出土していないが、住居との新旧関係から、時期は7世紀第Ⅲ四半期以降と思われる。

第32号土坑（第316図）

調査区西側、F－2グリッドに位置する。第233号住居跡と重複し、新旧関係は本遺構が新しい。

平面形は南北にやや長い長円形で、規模は長軸0.80m、短軸0.55mで、確認面からの深さは0.22mである。

遺物は出土しておらず、時期は不明である。

第33号土坑（第316図）

調査区南西側、G－2・3グリッドに位置する。

平面形は不整形で、規模は長径1.25m、短径1.05mで、確認面からの深さは0.18mである。底面は平坦で、覆土に炭化物を多く含み、最下層には炭化物が集積する。

遺物は出土しておらず、時期は不明である。

第34号土坑（第316図）

調査区ほぼ中央南寄り、I－4グリッドに位置する。第118・119号住居跡と重複し、新旧関係は両住居跡よりも新しい。

平面形はほぼ円形で底面は平坦、規模は直径1.30mで、確認面からの深さは0.27mである。

遺物は出土せず時期は不明であるが、他遺構との重複関係から、8世紀第Ⅰ四半期以降と思われる。

第35号土坑（第316図）

調査区北側、D－4グリッドに位置する。第111号住居跡、第8号溝跡と重複し、新旧関係は両遺構よりも古い。第111号住居跡により西側を壊されており、平面形は不明である。規模は残存している東西方向で0.64m、確認面からの深さ0.17mである。覆土は炭化物を多量に含む。

遺物が出土しておらず時期は不明であるが、他遺構との新旧関係から、7世紀末以前と思われる。

第36号土坑（第316図）

調査区北側、E－4・5グリッドに位置し、流路跡第二次堆積層の形成過程に掘り込まれている。重複する遺構はないが、周辺では本遺構と同じ頃に掘り込まれたピットが数基確認されている。

平面形は楕円形で、規模は長径0.80m、短径0.75mで、確認面からの深さは0.23mである。覆土には炭化物を多量に含む。

遺物は出土しておらず時期は不明であるが、流路跡第二次堆積層の形成過程に掘り込まれていることから、6世紀後半頃以降に位置づけられる。

第37号土坑（第316図）

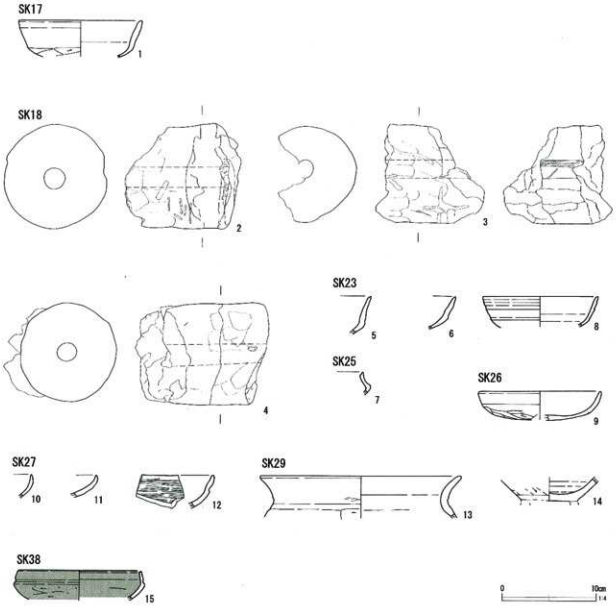
調査区西側、H－2グリッドに位置する。第172号住居跡と重複し、同住居跡の覆土中に掘り込まれている。

平面形はほぼ円形で、規模は長径0.80m、短径0.70mで、確認面からの深さは0.35mである。

出土遺物はなく時期は不明だが、他遺構との新旧関係から、6世紀第Ⅱ四半期以降と思われる。

第38号土坑（第316・317図）

調査区北西、D・E－2グリッドに位置し、流路跡第二次堆積層に掘り込まれている。平面形は、円



第317図　土坑出土遺物

を二つ連結した形状であるが、底面は平坦で、覆土堆積状況も同じであることから、二つの円は同時性がある。規模は長軸1.14m、短軸0.49mで、確認面からの深さは0.24mである。

遺物は、覆土中から土師器坏の破片が1点出土しているが、流路跡堆積層の形成期と同じ6世紀後半のものであることから、混入の可能性がある。土坑の時期は6世紀後半以降であろう。

第39号土坑（第316図）

調査区北西、D・E－2グリッドに位置し、流路跡第二次堆積層に掘り込まれている。

平面形は東西に長い長円形で、規模は長軸1.05m、短軸0.58mで、確認面からの深さは0.40mである。底面はやや凹凸をもち、壁は比較的垂直に立ち上がる。底面および壁に被熱箇所が見られ、覆土は、上層から下層まで焼土ブロックを大量に含み、最下層に炭化物を集積する。

出土遺物はなく時期は不明であるが、流路跡との新旧関係から、6世紀後半以降に位置づけられる。

第40号土坑（第316図）

調査区北側、E－4グリッドに位置する。第149号住居跡覆土中で検出しており、新旧関係は同住居

跡よりも新しい。北側はトレンチで壊されて確認できなかった。検出当初、カマド燃焼部および煙道部と認識し精査を試みたが、住居跡本体をまったく捉えることができなかった。また、覆土には炭化物や焼土ブロックが多く見られたことから、流路跡に多く掘られた被熱のある土坑と判断した。

平面形は長円形の土坑に、煙道状の短い溝が取り付く形状で、溝の先端部は煙出しピットのようにやや深く掘り窪められていた。北側は推定であるが、トレンチ反対側の土層断面に本土坑が表れなかったことから、トレンチ内で収束する規模であったと思われる。推定規模は、長軸1.62m、短軸0.64m、確認面からの深さ0.30mである。

出土遺物はないが、他遺構との重複関係から時期は、7世紀第Ⅳ四半期以降と思われる。

第41号土坑（第316図）

調査区北側、E・F－1グリッドに位置し、流路跡堆積層に掘り込まれる。一部が調査区域外におよぶが、平面形および規模は、楕円形で長軸1.05m、短径0.95mで、確認面からの深さは0.35mである。覆土は地山と同じ砂層であるが、黄褐色シルト土ブロックや焼土ブロックを多く含んでいることから埋戻されている可能性がある。

出土遺物はなく時期は特定できないが、流路跡第一次堆積層を掘り込み、第二次堆積層に覆われていることから、時期は6世紀中頃に特定できよう。

第42号土坑（第316図）

調査区北寄り、F－5グリッドに位置し、流路跡第二次堆積層に掘り込まれる。平面形は楕円形で、規模は0.90×0.85m、確認面からの深さは0.32mで、断面形は摺鉢状となる。覆土には周辺から流れ込んだしまりの弱い褐色の粗粒砂が堆積する。

出土遺物はないが、流路跡との関係から時期は6世紀後半以降と思われる。

第127表　土坑出土遺物観察表（第317図）

番号	遺構番号		種別	器種	口径	器高	底径	重量	5	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	SK	17	土師器	坏	(13.0)	4.0	－	23.2	15	比企	雲、角	普通	にぶい褐	内面黒色物質付着	
2	SK	18	土製品	羽口	長12.3幅11.0重1082.5						角	普通			236-2
3	SK	18	土製品	羽口	孔径2.0長11.5幅10.3重554.6						角	普通	暗赤褐	2個体接合	236-2
4	SK	18	土製品	羽口	孔径1.8長13.9幅10.5重1217.9						角	普通		網目状の在痕	236-2
5	SK	23	土師器	坏	－	4.0	－	8.2	5	群東		普通	橙		
6	SK	23	土師器	坏	－	2.5	－	5.4	5	栃南		普通	橙		
7	SK	25	土師器	坏	－	3.5	－	13.7	5	埼北		普通	橙		
8	SK	25	土師器	坏	(12.2)	3.2	－	15.9	10	埼北	角	普通	黒褐		
9	SK	26	土師器	坏	(12.8)	3.0	－	22.9	20	埼北	角	良好	橙		
10	SK	27	土師器	坏	－	2.6	－	8.3	5	埼北	角	普通	にぶい橙		
11	SK	27	土師器	坏	－	2.5	－	11.4	5	埼南	雲	良好	にぶい褐		
12	SK	27	土師器	坏	－	3.5	－	13.7	5	栃南	雲、角	良好	橙		
13	SK	29	土師器	甕	(21.2)	3.4	－	28.6	5	群東	雲、角	普通	にぶい褐		
14	SK	29	土師器	高台付坏	－	2.6	－	44.6	20	千北		普通	褐灰		
15	SK	38	土師器	坏	(13.2)	13.2	－	15.3	5	武蔵	雲、角	普通	黒	カマド	

3．井戸跡

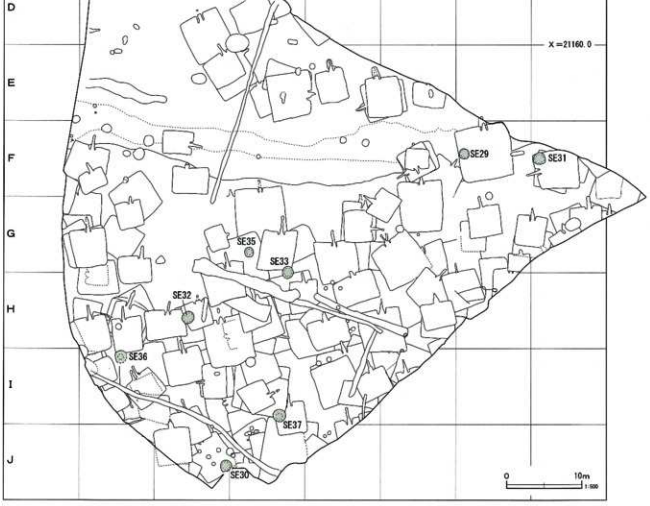
第３・４次調査区で検出された井戸跡は８基である。分布に偏りはなく、平面形はいずれも円形で、断面形状は、円筒状や漏斗状のものがある。

いずれも出土遺物がなく、時期は不明であるが、覆土の状態から中世末から近世のものであろう。

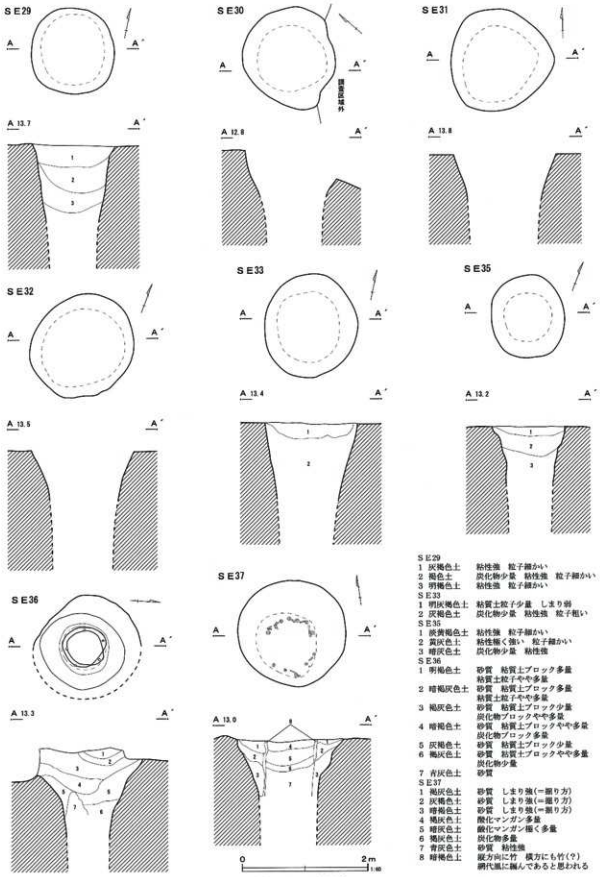
第29号井戸跡（第319図）

調査区北東、F－７グリッドに位置する。第135号住居跡と重複し、新旧関係は同住居跡よりも新しい。確認面から1.20mの深さまで検出したが、底面は未検出である。

平面形ほぼ円形で、規模は1.35m×1.30m、下方にすぼまる円筒状に掘り込まれる。



第318図　井戸跡分布図



S E29
1 灰褐色土　粘性強　粒子細かい
2 褐色土　炭化物少量　粘性強　粒子細かい
3 明褐色土　粘性強　粒子細かい
S E33
1 明灰褐色土　粘質土粒子少量　しまり弱
2 灰褐色土　炭化物少量　粘性強　粒子粗い
S E35
1 炭黄褐色土　粘性強　粒子細かい
2 黄灰色土　粘性極く強い　粒子細かい
3 暗灰色土　炭化物少量　粘性強
S E36
1 明褐色土　砂質　粘質土ブロック多量
粘質土粒子やや多量
2 暗褐灰色土　砂質　粘質土ブロック多量
粘質土粒子やや多量
3 褐灰色土　砂質　粘質土ブロック少量
炭化物ブロックやや多量
4 暗褐色土　砂質　粘質土ブロックやや多量
炭化物ブロック多量
5 灰褐色土　砂質　粘質土ブロック少量
6 褐灰色土　砂質　粘質土ブロックやや多量
炭化物少量
7 青灰色土　砂質
S E37
1 褐灰色土　砂質　しまり強(一部り方)
2 灰褐色土　砂質　しまり強(一部り方)
3 暗褐色土　砂質　しまり強(一部り方)
4 褐灰色土　微化マンガン多量
5 暗灰色土　炭化マンガン極く多量
6 褐灰色土　炭化物多量
7 青灰色土　砂質　粘性強
8 暗褐色土　縦方向に竹　横方にも竹(?)
網代風に編んであると思われる

第319図　井戸跡

第30号井戸跡（第319図）

調査区南端、J－3グリッドに位置する。第223号住居跡と重複し、両住居跡よりも新しい。南側は調査区域外におよぶ。確認面から0.75mの深さまで検出したが底面は未検出である。

平面形および規模は、直径1.66mの楕円形で、断面形は下方へすぼまる形状である。

第31号井戸跡（第319図）

調査区東側、F－8グリッドに位置する。第143号住居跡と重複し、新旧関係は両住居跡よりも新しい。確認面から0.80mの深さまで検出したが底面は未検出である。確認面での平面形および規模は、1.72×1.55mの楕円形で、断面形は、確認面から0.60mの深さを境に、これより上部は外側に開き、下部は直径1.05mの円筒状となる。

第32号井戸跡（第319図）

調査区中央東寄り、H－3グリッドに位置する。第125・169・214号住居跡と重複し、新旧関係はいずれの住居跡よりも新しい。確認面から0.80mの深さまで掘り下げたが、底面は未検出である。

確認面での平面形および規模は1.72×1.57mの楕円形で、確認面から0.65mの深さを境に上部は開き、下部は直径1.17mの円筒状となる。

第33号井戸跡（第319図）

調査区中央、H－4・5グリッドに位置する。第173・190号住居跡と重複し、新旧関係は両住居跡よりも新しい。確認面から1.25mの深さまで検出したが、底面は未検出である。

平面形はほぼ円形で、断面形は下方にすぼまる形状である。規模は1.65×1.48mである。

第35号井戸跡（第319図）

調査区中央、G－4グリッドに位置する。第176号住居跡と重複し、新旧関係は同住居跡よりも新しい。確認面から0.95mの深さまで検出したが、底面は未検出である。

確認面での平面形および規模は1.30×1.17mで、断面形は確認面から0.60mの深さを境に、上部はやや外側に開いて立ち上がり、下部は直径0.75mの円筒状となる。

第36号井戸跡（第319図）

調査区南西、I－2グリッドに位置する。第172・220号住居跡と重複し、新旧関係は両住居跡よりも新しい。確認面から1.90mの深さまで検出したが、底面は未検出である。

確認面から1.15mの深さを境に上部は外側に開き、下部は直径0.70mの円筒状になる。シガラミが検出され、周囲は掘方への充填土である。シガラミの杭は長さ20～30cm、太さ約4cmの丸竹で5本、横材は半截されて竹材で2段が遺存していた。

第37号井戸跡（第319図）

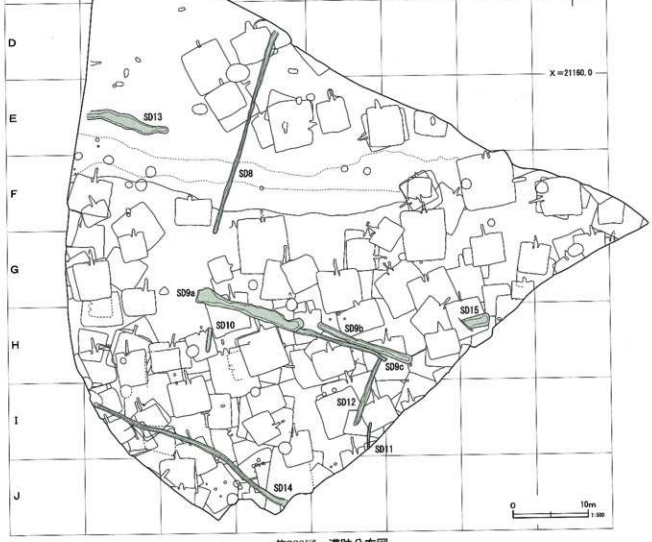
調査区南側、I－4グリッドに位置する。第221・229・235・259号住居跡と重複し、新旧関係はいずれの住居跡よりも新しい。確認面から0.90mの深さまで検出したが、底面は未検出である。

平面形は直径1.72mの円形で、確認面から0.80mの深さを境に上部は外側に開き、下部は直径0.95mの円筒状となる。シガラミが検出され、この周囲が掘方への充填土といえる。シガラミの杭は長さ70～80cm、太さ約5cmの丸竹で11本、横材は半截されて竹材で2段が遺存していた。

4．溝跡

第３・４次調査区で確認された溝跡は10条である。調査区中央から北側では、第８号溝跡と第９号溝跡がほぼ直行しており、鷲神社境内範囲とおおむね一致する。両遺構からの出土遺物は非常に少なく、第９b号溝跡の覆土で16世紀末頃のかわらけが出土したほかは、時期の特定できる遺物は検出されず、時期特定の決め手に欠ける。H－５・６グリッドでは、江戸時代の焙烙や陶磁器が出土しており、溝跡がこの時代まで下る可能性もある。

第13・15号溝跡を除いた他の溝跡も、第８号溝跡や第９号溝跡と似た灰色粘質土を覆土にもっている。また、第12号溝跡は第９号溝跡と直行する位置関係にあり、それぞれの構築時期は大きく隔たるものではない。



第320図　溝跡分布図

また、第８・９号溝跡の個別報告は本項で行うが、「6.方形区画」でも取り扱っているので参照願いたい。

第８号溝跡（第321・322・323図）

調査区北側、D・E－４、F－３・４、G－３グリッドに位置し、第111・158・160号住居跡、第35号土坑と重複し、新旧関係はいずれの遺構よりも新しい。南側はGライン付近で立ち上がり、北側は調査区域外におよび未検出である。南側の立ち上がりは、底面が上昇してきていることに加え、確認面自体が下がっており、実際はこれより南へ続いていたものと思われる。

調査区北側を南北方向に走り、走行方向はN－18°－Eである。規模は、確認された範囲で、全長28.0m、幅は北側で0.8m、中央で0.4m、南側で0.7mである。掘り込み形状と底面の深さは一様でなく、地点によって様相がまったく異なる。また、おおむね一直線と捉えられる平面形も、E－４グリッドで不整合が見られる。

ただし覆土は、下層から上層まで一様の灰色シルト土で、掘り込み面には鉄分が厚く沈着する。また、図化はできなかったが、鉄分沈着層は掘り込み面だけでなく、北側から中央部においては覆土中に１～２層確認された。

以上から溝跡は、何度かにわたって掘り返されており、開口中は水路のような機能を果たしていたものと考えられる。

遺物は、須恵器甕の破片が出土しているが、他遺構からの混入である。

第９a号溝跡（第321・322・323図）

調査区中央、G－３・４、H－３・４グリッドに位置する。第130・164・173・176号住居跡、第９c号溝跡と重複し、第９c号溝跡よりも古く、住居跡よりも新しい。

調査区中央を東西方向に走り、走行方向はN－71°－Wである。箱形に掘り込まれ、底面はほぼ平坦、東側はやや浅く、西側がより深く掘り込まれる。規模は全長15.0m、幅は西側で2.2m、東側で1.8m、確認面からの深さは0.8mである。

第９b号溝跡（第321・322・323図）

調査区中央、H－５・６グリッドに位置する。第108・120・147・152・164・249号住居跡と重複し、いずれの住居跡よりも新しい。第９c号溝跡とは一部重複し、新旧関係は同溝跡よりも古い。

調査区東側を東西方向に走り、走行方向はN－68°－Wで、箱形に掘り込まれる。規模は長さ13.5m、最大幅が1.3m、最小幅が0.9mである。

遺物は、覆土上層からかわらけが出土している。出土遺物の時期は16世紀末頃であるが、確実に伴うものか判断できない。時期は、「方形区画」の項で後述する理由により16世紀末頃から近世の幅で理解しておきたい。

第９c号溝跡（第321・322・323図）

調査区中央、H－４・５・６グリッドに位置する。第108・120・147・164・173号住居跡と重複し、新旧関係はいずれの住居跡よりも新しい。西端で第９a号溝跡と重複するほか、東端で第12号溝跡と接する。新旧関係は、第９a号溝跡よりも新しく、第12号溝跡とは不明である。

東西方向に走り、走行方向はN－71°－Wで、第９a・９b号溝跡とほぼ一致する。掘り込みは深い地点で0.25m、浅い地点で0.1mであり、東側より西側の方が浅い。規模は長さ12.5mで、最大幅1.0m、最小幅0.5mである。

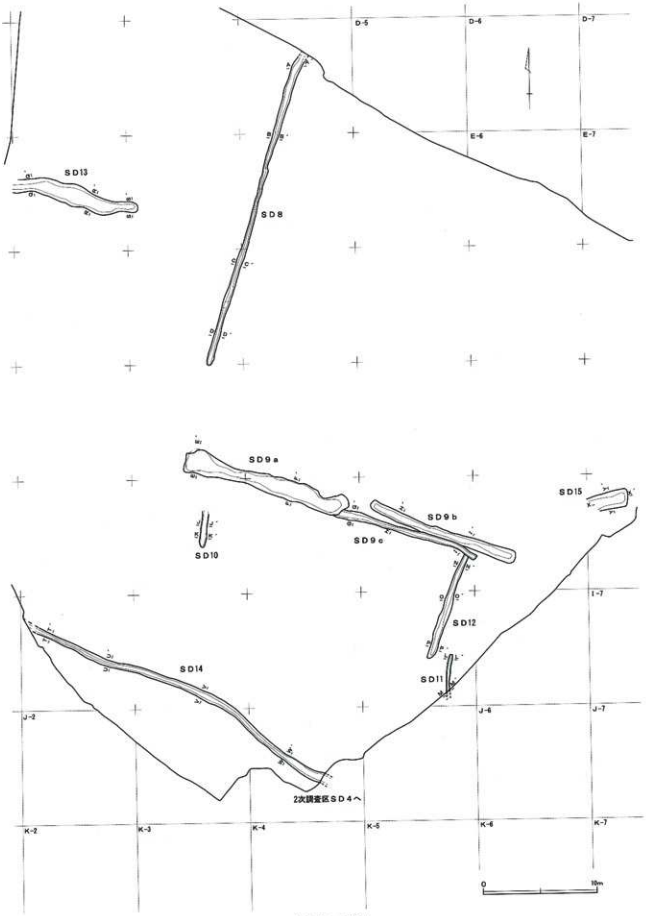
遺物は出土しておらず、時期は不明である。

第９号溝跡一括遺物としては、土師器坏・甕、須恵器坏・甕などが破片で出土しているが、いずれも混入である。

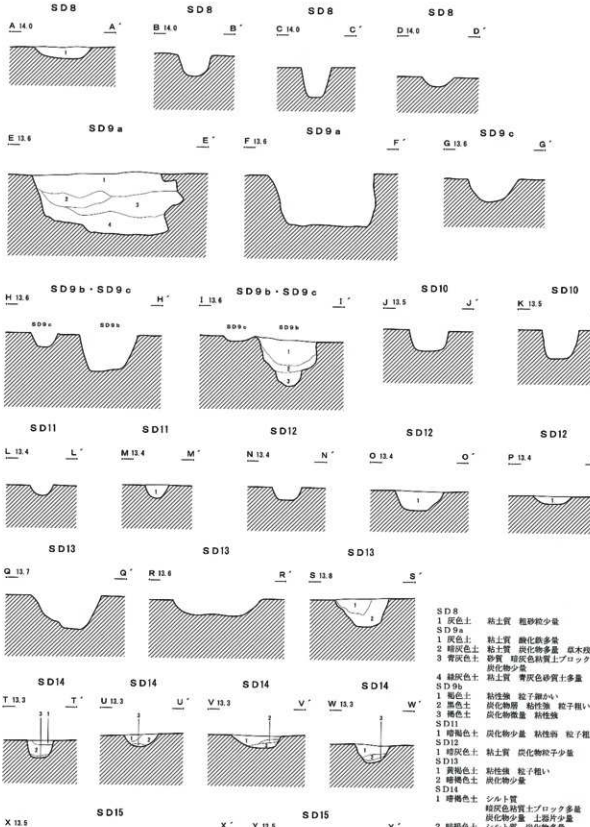
第10号溝跡（第321・322・323図）

調査区中央、H－３グリッドに位置する。第125号住居跡と重複し、新旧関係は同住居跡よりも新しい。北側は試掘溝に壊されるが、これより北側では確認されず、試掘溝内もしくは第９a号溝跡付近で収束していたものと思われる。

溝は南北方向に走り、走行方向はN－８°－Eで、

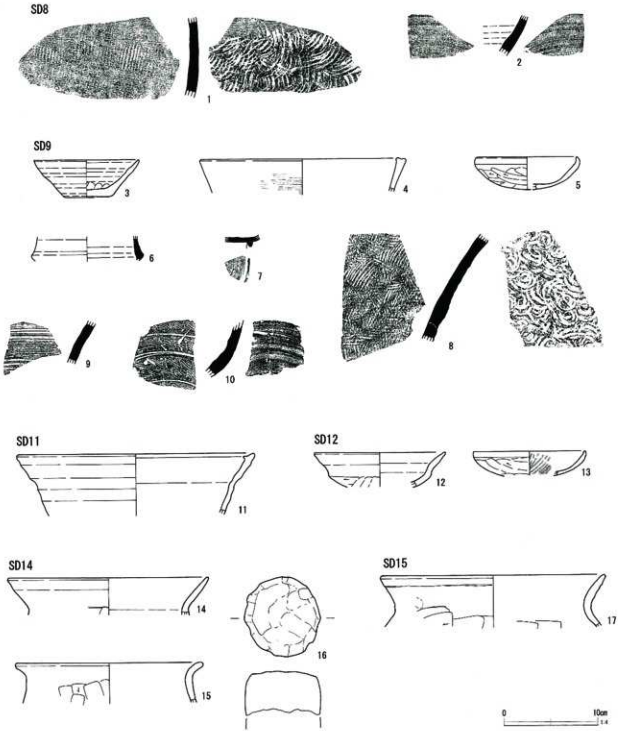

SD13
SD8
SD9a
SD9b
SD9c
SD10
SD15
SD12
SD11
SD14
2次調査区SD4へ
D-5
D-6
D-7
E-6
E-7
I-7
J-2
J-6
J-7
K-2
K-3
K-4
K-5
K-6
K-7
0
10m

第321図　溝跡



SD8
1 灰色土　粘土質　粗砂粒少量
SD9a
1 灰色土　粘土質　鐵化鉄多量
2 暗灰色土　粘土質　炭化物多量　草木残存
3 青灰色土　砂質　暗灰色粘質土ブロック多量
炭化物少量
4 緑灰色土　粘土質　青灰色砂質土多量
SD9b
1 褐色土　粘性強　粒子細かい
2 黒色土　炭化物層　粘性強　粒子粗い
3 褐色土　炭化物微量　粘性強
SD11
1 暗褐色土　炭化物少量　粘性弱　粒子粗い
SD12
1 暗灰色土　粘土質　炭化物粒子少量
SD13
1 黄褐色土　粘性強　粒子粗い
2 暗褐色土　炭化物少量
SD14
1 暗褐色土　シルト質
暗灰色粘質土ブロック多量
炭化物少量　土器片少量
2 暗褐色土　シルト質　炭化物多量
3 黄褐色土　シルト質

第322図　溝跡土層断面図



第323図　溝跡出土遺物

第128表　溝跡出土遺物観察表（第323図）

番号	遺構番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	SD 8	須恵器	甕	－	7.9	－	218.6	5	在地か		普通	灰		
2	SD 8	須恵器	甕	－	4.3	－	39.9	破片	東海		普通	灰白		
3	SD 9	ﾛｸﾛ土師器	坏	11.2	3.9	5.1	141.7	95		角	普通	にぶい黄橙	敷き物跡	
4	SD 9	カワラケ	鉢	(27.1)	3.5	－	18.3	5			普通	暗青灰		
5	SD 9	土師器	坏	(10.6)	3.4	－	42.6	40	埼北	雲、角	良好	橙		
6	SD 9	須恵器	坏	－	2.7	－	27.2	10	東海		良好	灰		
7	SD 9	須恵器	高台付坏	－	1.2	－	9.3	破片	東海		普通	灰		
8	SD 9	須恵器	甕	－	11.2	－	536.8	破片			普通	灰	SJ166掘り方	
9	SD 9	須恵器	甕	－	4.5	－	40.7	破片	南比企		普通	灰		
10	SD 9	須恵器	鉢	－	5.8	－	69.7	破片			普通	灰		
11	SD 10	陶器	土鍋	(24.0)	6.4	－	54.6	10		角	良好	褐灰	外面に煤付着	
12	SD 12	土師器	坏	(13.8)	3.7	－	28.5	5	埼北	雲、角	普通	明赤褐		
13	SD 12	土師器	坏	(11.9)	2.5	－	18.5	20	埼北	角	普通	明褐灰		
14	SD 14	土師器	甕	(21.2)	4.0	－	27.0	5	千北	雲、角	普通	明赤褐		
15	SD 14	土師器	甕	(19.0)	4.2	－	25.0	5	栃南	雲	普通	にぶい褐		
16	SD 14	土製品	支脚	3.5	2.1	－	41.6	5			普通	明褐		
17	SD 15	土師器	甕	(23.6)	5.6	－	67.9	5	埼北	片、角	普通	明赤褐		

規模は長さ3.3m、幅は0.6mで、掘り込みの形状は箱型である。

遺物は、陶器の土鍋が破片で出土している。

第11号溝跡（第321・322図）

調査区南東側、I－5グリッドに位置する。第97・123・124・138号溝跡と重複し、新旧関係は、いずれの住居跡よりも新しい。

南北方向に走り、走行方向はN－6°－Eである。規模は長さ3.5m、最大幅が0.45m、最小幅は0.3mである。確認面からの深さは0.2mで底面は傾斜がなく水平である。

遺物は出土しておらず、時期は不明である。

第12号溝跡（第321・322・323図）

調査区南東、H・I－5グリッドに位置する。第97・133・134・138・147・151住居跡と重複し、新旧関係は、いずれの住居跡よりも新しい。第9c号溝跡とは、北端で90°の角度で直交し、重複部分では同溝跡よりも30cm以上深く掘り込まれている。同溝跡との新旧関係は不明であるが、以上のような位置関係にあること、また覆土が近似していたことから、両者は関連していたものと推測される。

溝は南北方向に走り、走行方向はN－21°－Eである。規模は全長11m、最大幅が0.8m、最小幅は0.3mである。

遺物は土師器坏の破片が出土しているが、溝跡に伴うものではなく混入と思われる。

第13号溝跡（第321・322図）

調査区北西、E－2・3グリッドに位置する。流路跡第二次堆積層に掘り込まれており、他遺構との重複はない。西側は調査区域外におよんでおり、全長は不明である。

溝は東西方向に走り、走行方向はN－80°－Wである。流路跡の立ち上がり付近の覆土中を、これと同一の方向で走行している。掘り込み自体が明確でなく、平面、断面ともにだらだらとした印象であったことから、溝跡というよりは流路跡の名残のようなものであったのかもしれない。

確認された規模は、長さ11.2mで、最大幅2.1m、最小幅0.9m、確認面からの深さは0.45mである。

遺物は出土していないが、流路跡との関係から、時期は6世紀後半以降と思われる。

第14号溝跡（第321・322・323図）

調査区南側、I－2・3、J－3・4グリッドに位置する。第181・183・187・188・196・203・219・

220・223・234・243・246・250号住居跡、第24号土坑と重複し、新旧関係はいずれの遺構よりも新しい。西側、東側はともに調査区域外におよび、東側は第4号溝跡として第2次調査区でも検出されている。

北西から南東方向へ向かっており、走行方向はN－63°－Wである。確認された範囲での規模は、第2次調査区も含めると全長30.0m、最大幅1.0m、最小幅0.5mである。

出土遺物は土師器甕、須恵器坏などが出土しているがいずれも混入である。時期は特定できないが、第2次調査区西際の第4号溝跡の堀断面や他遺構との重複状況を見る限り、新旧関係はいずれの遺構よりも新しい。また、走行方向は現利根川堤防とほぼ一致していることを考えると、比較的新しい時期の可能性がある。

第15号溝跡（第321・322・323図）

調査区東側、H－6・7グリッドに位置する。第116・260号住居跡と重複し、新旧関係はいずれの住居跡よりも新しい。西側部分は途絶えており長さは不明であるため、土壙ではなく溝跡と判断した。

規模は、検出し得た範囲内で長さ3.40m、幅1.44m、深さ0.40mで、走行方向はN－77°－Wである。断面形は底面が平坦な台形である。

出土遺物はなく、時期は不明である。

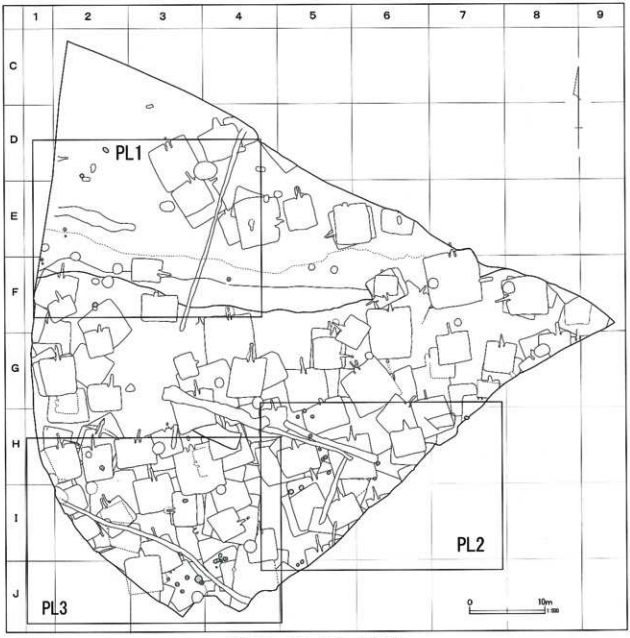
5．ピット

第3・4次調査区ではピットが多数確認されている。分布に特徴的な偏りは見られないが、調査区北側では密度がやや希薄である。出土位置や出土層位、検出状況からピットを大別すると、A類－住居跡外、B類－流路跡堆積層中、C類－住居跡覆土中、D類－貼り床下に分類される。このうち本項で扱うピットは、住居跡に帰属しないピット群A～C類である。なお、D類に関しては、住居跡へ帰属するもの、住居跡に先行するものに細分されようが、調査段階で判断のつかなかったものも多く、まとめて住居跡報告で取り扱った。

ピットの時期に関しては、遺物がほとんど出土せず、大半はその特定ができない。しかしながら、B類には、F－1グリッドP1、E－2グリッドP2・3のように、流路跡堆積層の形成過程に掘り込まれているものがあり、これらは6世紀中頃の洪水直後という、比較的限定された時間幅に特定できるだろう。

第129表　グリッドピット計測表

ピット番号	所在グリッド	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P1	D－2G	90	55	10
P1	E－2G	55	55	5
P2	E－2G	25	25	15
P3	E－2G	45	45	28
P1	F－1G	25	23	30
P2	F－1G	40	35	30
P1	F－2G	70	65	25
P1	F－4G	55	55	15
P1	H－5G	48	48	20
P2	H－5G	55	50	20
P3	H－5G	50	48	15
P4	H－5G	50	50	32
P5	H－5G	45	35	20
P6	H－5G	(50)	48	10
P7	H－5G	(53)	(50)	20
P1	H－6G	48	38	10
P2	H－6G	60	45	15
P1	H－7G	70	45	12
P1	I－3G	73	45	18
P1	I－5G	65	65	40
P2	I－5G	65	65	38
P1	J－5G	45	40	15
P2	J－5G	58	45	12
P1	J－3G	45	45	25
P2	J－3G	50	40	20
P3	J－3G	60	60	35
P4	J－3G	55	45	25
P5	J－3G	60	53	28
P6	J－3G	110	100	10
P7	J－3G	61	57	25
P1	J－4G	25	23	12
P2	J－4G	55	50	8
P3	J－4G	55	50	8
P4	J－4G	32	(30)	5
P5	J－4G	50	(43)	13
P6	J－4G	(45)	(20)	10
P7	J－4G	58	48	25

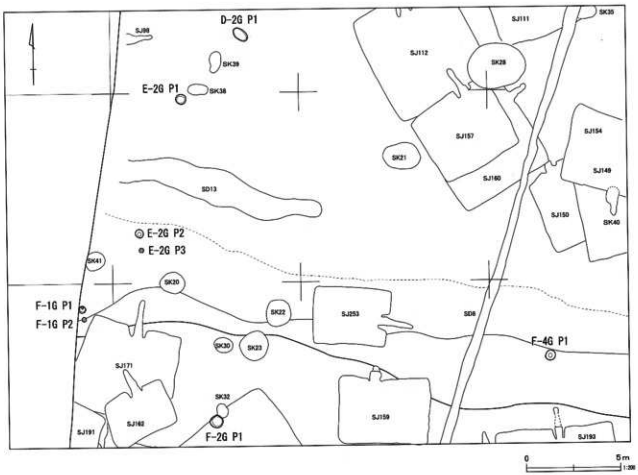


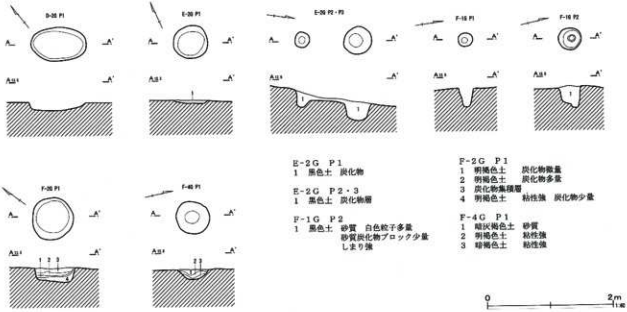
第324図　グリッドピット区割図

第325図　グリッドピット出土遺物

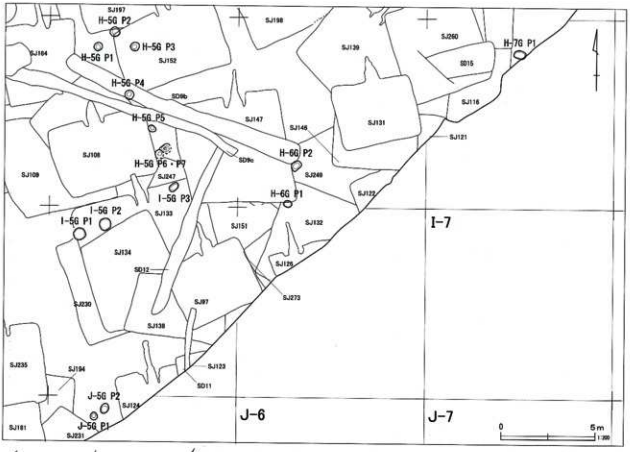
第130表　グリッドピット出土遺物観察表（第325図）

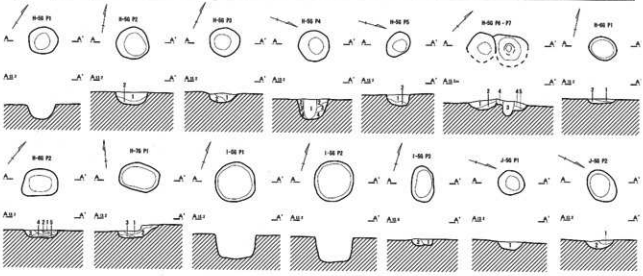
番号	遺構番号		種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	GP	74	土師器	高坏	－	5.1	(9.4)	121.1	35			良好	橙		





第326図 グリッドピット（1）





H-5G　P2
1　黒褐色土　砂質　粘質土　炭化物やや多量
2　暗褐色土　砂質　粘質土やや多量

H-5G　P3
1　黒褐色土　砂質　炭化物やや多量
2　暗灰色土　砂質　粘質土

H-5G　P4
1　暗褐色土　粘質　粘質土・炭化物やや多量（柱穴）
2　黒褐色土　粘質　粘質土・炭化物やや多量
3　暗褐色土　粘質　粘質土多量
4　暗褐色土　粘質　粘質土やや多量

H-5G　P5
1　黒褐色土　砂質　炭化物少量
2　黄褐色土　砂質　粘質土やや多量

H-5G　P6・7
1　暗褐色土　砂質　炭化物微量
2　明白色土　砂やや多量　粘質土粒子少量　炭化物微量
3　暗褐色土　粘土質　砂・粘質土・焼土粒子・炭化物少量
4　暗黄色土　粘土質　炭化物微量
5　明黄色土　砂質　炭化物微量

H-6G　P1
1　暗青灰色土　粘質土・炭化物少量
2　暗青灰色土　粘質土・炭化物やや多量

H-6G　P2
1　暗褐色土　焼土・炭化物やや多量
2　青灰色土　焼土やや多量
3　暗灰色土　焼土・炭化物多量
4　暗灰色土　焼土・炭化物少量
5　暗灰色土　焼土・炭化物多量

H-7G　P1
1　灰褐色土　炭化物微量
2　黄褐色土　粘質土多量
3　黒色土　焼土・炭化物多量

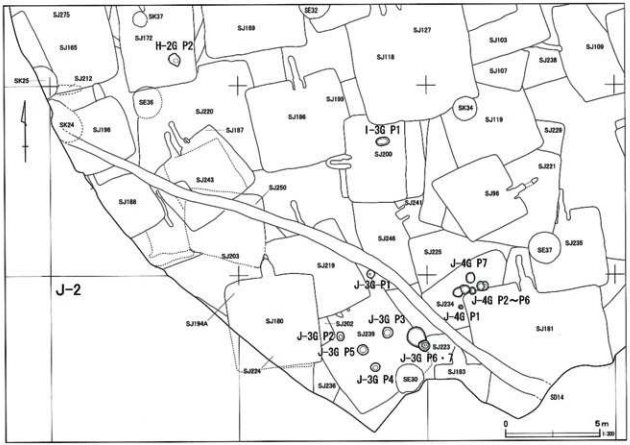
I-5G　P1
1　暗青灰色土　炭化物少量
2　暗青灰色土　粘質土粒子・炭化物少量

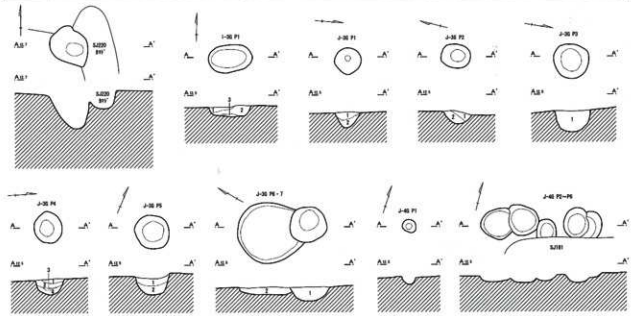
J-5G　P1
1　赤褐色土　焼土・炭化物極多量

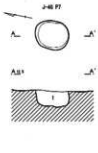
J-5G　P2
1　暗褐色土　焼土少量　炭化物やや多量
2　赤褐色土　焼土・炭化物多量

0　2m

第327図　グリッドピット（2）







I-3G P1
1 暗褐色土 焼土・炭化物多量
2 明褐色土 焼土・炭化物微量
3 炭化物集積層

J-3G P1
1 暗褐色土 焼土・炭化物やや多量 粘性強
2 黄褐色土 炭化物微量 粘性強

J-3G P2
1 暗褐色土 焼土・炭化物やや多量 粘性強
2 黄褐色土 炭化物微量 粘性強

J-3G P3
1 暗褐色土 炭化物少量

J-3G P4
1 暗褐色土 炭化物微量
2 明褐色土 炭化物多量
3 炭化物集積層
4 明褐色土 炭化物微量

J-3G P5
1 明褐色土 炭化物多量 焼土少量
2 明褐色土 炭化物少量 粘性強

J-3G P6・7
1 焼灰褐色土 粒子細かい炭化物
2 暗黄褐色土 炭化物やや多量 粘性弱

J-4G P7
1 暗褐色土 炭化物少量

0 2m 1:60

第328図 グリッドピット（3）

出土遺物は唯一、I－5グリッドP1で、土師器高坏の脚部が出土している。時期は6世紀第Ⅰ四半期と思われる。

6．方形区画

調査前、第3・4次調査区には鷲神社とその社叢が広がっており、境内地は周囲の水田面より一段高い丘状の地形であった。

この高まりの範囲と方向は、「4.溝跡」で報告した第8・9号溝の走行方向にほぼ一致することから、両者は関連性の深い一連の遺構と判断された。このため、以下では便宜上、この境内地全体の高まりを「盛土造成」、溝跡を「区画溝」と呼称し、合わせて「方形区画」として述べていくこととする。また、鷲神本殿の鎮座していた基壇上の高まりは「鷲神社社殿跡」として弁別する。

なお、区画溝の詳細については、「4.溝跡」で行っているので、そちらを参照されたい。

盛土造成と区画溝（第329図）

調査着手時点での盛土造成部には、中央やや北寄りに鷲神社の本殿跡、その東側の平坦面に拝殿跡、南側に飯積農業研修センター（飯積遺跡第1次調査区）のコンクリート基礎が残っていた。

鷲神社の本殿および拝殿跡は小高い基壇状の高まりで、東西、および北側は急激に落ち込み、南側は緩やかに傾斜し、研修センター跡で平坦面となる。これより南側は、80～100cmほどの比高差をもって、水田面へ急激に落ち込む。東側は、町道1229号線までが鷲神社境内（第3・4次調査区）、これより東側は水田（第2次調査区）となるが、境内から水田面へは80cmほど落ち込んでいる（第Ⅲ章第9図）。

標高は、本殿および拝殿のあった基壇部上面が16.2m、下面となる東側石垣下の参道部が15.0mである。研修センター跡付近は15.5mほどの平坦面となるが、この付近は、研修センター建設に伴って大きく改変されているものと思われる。というのも、この位置の第1次調査時点での標高は、16.3mほどあったからである。つまり、改変前の地形は、神社部分のみではなく、研修センターの南側まで高まりが続いていたものと推測される。

＜盛土造成＞

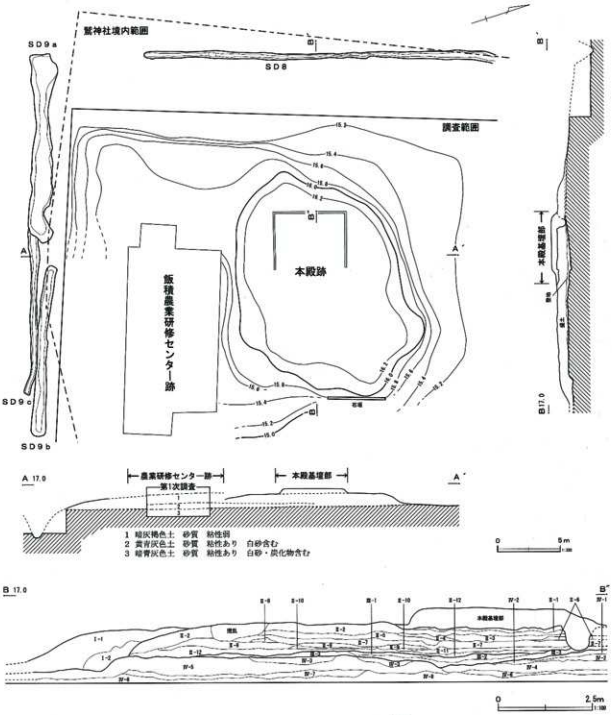
盛土造成部は初め、周辺の地形測量を行った。その後、本殿主軸に沿って土層観察面を設定し、これより南側を重機掘削した。その後、土層の精査を行い、写真撮影と図化を実施した。

土層観察によれば、Ⅰ層は鷲神社社殿（拝殿）部構築時の貼土層、Ⅱ層は盛土造成層、Ⅲ層は盛土の基盤となる整地層、Ⅳ層は盛土造成前の自然堆積層である。

以下、土層堆積状況を見ていくと、Ⅳ層は西から東へ僅かに下降しており（B－B′）、南北方向（A－A′）も、B－B′との交点および第1次調査（『飯積遺跡』1980北川辺町教育委員会の「トレンチ西面断面図」）の成果を参照すると、南へ向かってわずかに下降している。盛土東側では、Ⅳ層が30～40cmほど削り出され、しまりの弱いⅠ層が盛られる。この層は鷲神社の石垣や石段、拝殿を整備した時に盛られた土層で、本項で指す「盛土造成」とは別のものである。旧表土の標高は、西側で15.4m、東側や南側で15.3mで、傾斜は水平ないしは東側へわずかに落ち込んでいる。

Ⅲ層は灰色シルト土のよく締まった層で、一見して前後の土層との識別は容易であった。東西方向は15～20cm平均で盛られ、40cmほどの箇所もある。土層は東側へ向かうにつれ薄くなりやがて消滅する。本殿基壇部の盛られた範囲が摺鉢状に窪んでいるが、基壇造成に際しての整地（削平）、乃至は基壇や本殿建物の荷重と関係があるのであろうか。南北方向では、第1次調査ではⅢ層に相当する土層が確認されており、整地層の広がりがわかる。

Ⅱ層は盛土部で、非常に特徴的な造成方が観察さ



Ⅰ 盛土部(新)
-1 褐色土 シルト質 炭化物少量 しまり弱 (石段・石敷整備時の極めて新しい層)
-2 砂集積層 炭化物少量
Ⅱ 盛土部(旧)
-1 褐色土 砂質 砂やや多量
-2 暗褐色土 シルト質 砂多量 炭化物微量
-3 暗褐色土 シルト質 黄褐色粘土ブロック多量 炭化物ブロック微量 下位に砂を薄く堆積
-4 砂集積層
-5 黄褐色土 粘土質ブロック状に堆積 暗褐色シルト土多量 下位に砂薄く堆積
-6 暗褐色土 シルト質 黄褐色土ブロック多量 下位に砂薄く堆積
-7 暗褐色土 シルト質 黄褐色粘土ブロック多量 下位に砂薄く堆積
-8 砂集積層
-9 褐色土 シルト質 下位に砂堆積
-10 灰色土 シルト質 炭化物多量(建築地鎮に似る)
-11 褐色土 シルト質 褐色砂質土多量 下位に砂薄く堆積
-12 暗褐色土 シルト質 暗褐色シルト多量 下位に整地層と同一の層を薄く堆積
Ⅲ 整地層
-1 灰色土 シルト質 黄褐色シルトブロック多量
-2 灰色土 シルト質 黄褐色シルトブロック多量
-3 暗褐色土 シルト質 灰色シルトブロック多量
Ⅳ 盛土以前の地山
-1 黄褐色土 シルト質ブロック状に堆積 砂少量
-2 黄褐色土 シルト質と暗褐色シルト上層く多量
-3 黄褐色土 黄褐色ブロック少量
-4 暗褐色土 シルト質 黄褐色シルト土多量
-5 黄褐色土 黄褐色シルト土少量
-6 暗褐色土 シルト質 黄褐色シルト土多量
-7 暗褐色土 シルト質 暗灰色シルト土少量
-8 暗灰色土 粘土質 炭化物ブロック少量
(1979年第1次調査「トレンチ断面図」第3層)

第329図 方形区画

れた。構築土には主として褐色系のシルト土が用いられ、細別したほぼすべての層間に砂を薄く敷設している。部分的には、4・8層のように砂の集積も見られた。調査当初、担当者の間には、Ⅱ層全体を自然堆積とする意見もあったが、ブロック状の混入土が見られること、また整地層に似た灰色シルト土の堆積が散見されることから、自然堆積ではなく、人為的な盛土であると判断した。

盛土は、東西方向では東へ向かうにつれ徐々に低くなる。先述のように、東側では地山が削り出されている。これがⅡ層の傾斜とほぼ一致することから、地山削り出しは盛土造成時の可能性も考えられる。

南北方向の盛土は等高線図からの推測である。地形のところでも述べたので詳細は省くが、本来は鷲神社の乗る標高16.3mほどの高まりが、研修センター部分まで続いていたものと思われる。

＜区画溝＞

第3・4次調査区北側では、第8・9a～c号溝跡が検出された。第8号溝跡と第9号溝跡、また第9a～c号溝跡は、それぞれ規模や断面形状が大きく異なるうえに、9cが新しく9a・9bが古い（9aと9bの関係は不明）という新旧関係が見られた。しかし、覆土がともに灰色シルト土と近似していること、さらに走行方向が一致もしくは直交することから、それぞれはおおむね同時期で、一連のものと捉えられる。また同遺構の平面位置は、鷲神社の境内地に一致することから、区画の意味があったと判断される。

なお、北側の区画溝は調査区域外におよんでいるため未検出であり、東側についても確認面にまで達していなかったためか、なんら検出されなかった。ただし、西側や南側の検出状況から推して、東側を画す溝は、盛土造成部が落ち込む付近（石垣の東側）に、南北方向に走行していたものと考えたい。

以上の所見からすれば、区画溝の規模は東西で35mほどとなる。

区画溝底面と盛土造成部の標高差は、第8号溝跡の北側で260cm、中央で315cm、南側で295cmである。また、第9a～c号溝跡は、9aが380cm、9bが365cm、9cが330cmである。

神社鎮座地跡ということで、先行する遺構の存在などが予想されたため慎重に掘削を行ったが、本殿直下をはじめ、盛土部からは遺物の出土は認められなかった。

鷲神社跡（第330～332図）

鷲神社社殿（本殿および拝殿）は、標高16.3mの盛土造成の上に建てられていた。本殿は覆屋を備えた一間社流造りで、盛土造成の上にさらに盛土をした基壇状の高まりの上に鎮座し、東側には拝殿が構えられていた。

鷲神社は調査着手前に新宮地への遷座儀が執り行われており、着手時には旧社殿は取り払われた後で、本殿基壇部のみが残り、拝殿跡地は硬くしまった更地となっていた。拝殿部は調査の結果、東側は先述のとおり一部に増設があるものの、ほぼ直接、盛土造成の上に乗っていることが判明した。

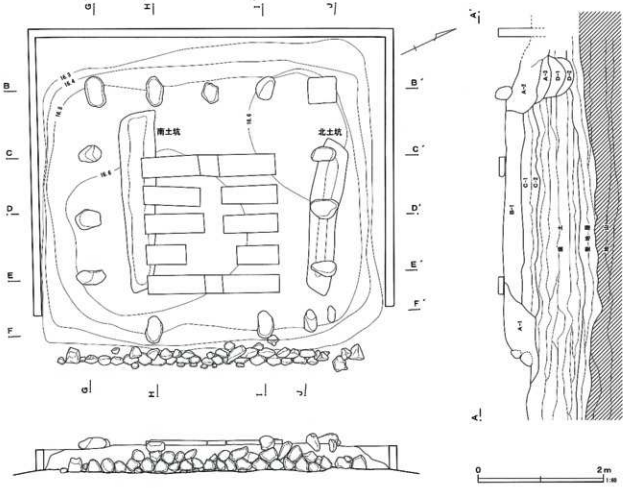
基壇部は、正面を除く三辺がコンクリート擁壁で保護されており、基壇面には覆屋の礎石やこれを保護するためのコンクリートが露出していた。正側面には貼石が見られ、上部が露わになっていた。

礎石には本殿に用いられた板状の截石と、覆屋に用いられた河原石の2種が見られた。板石は北東部がわずかに顔を覗かせるだけで、多くは後世の流れ込んだ土に覆われていた。一方、川原石は、それぞれの半分ほどがコンクリートで被覆されていた。

また、北側の造成部斜面には灰や焼土ブロックを伴って被熱した瓦が散布していた。

調査の結果、鷲神社は最低でも一回の建て替えを経ており、2段階に分けて捉えられた。古い方から第1段階、第2段階とし、土層の特徴からA～D層に大別した。A層は第2段階の土層で、B層～D層がそれ以前のものである。

なお、第330図の平面図はこの段階を反映しておらず、それぞれの段階を合わせたものである。



鷲神社
A　第２段階基壇部構築段階
A-1　褐色土　砂質　しまり弱
A-2　褐色土　砂質　瓦を多量に含む（Ⅰ層類似土）
A-3　褐色土　砂質　炭化物少量　火熱に瞬砂利堆積
B　第１段階　基壇跡
B-1　褐色土　砂質　黄褐色シルト土多量　砂多量
C　第１段階以前の基壇跡
C-1　黄褐色土　シルト質　褐色砂質土多量　砂多量
C-2　褐色土　砂質　砂多量　下位に瞬砂
D　区画をした溝
D-1　褐色土　砂質
D-2　褐色土　砂質　砂利少量　灰色シルトブロックを多量に含む（水成堆積層）

第330図　鷲神社社殿部（１）

＜第１段階＞　B～D層

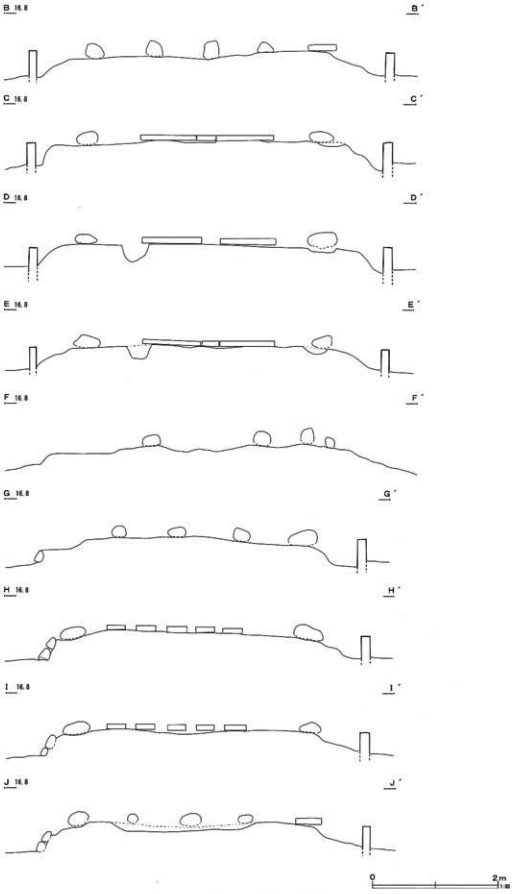
第１段階の基壇上面は盛土造成から60cmほどの高さにある。構築土は、非常に固く締まっており、黄褐色シルト土や灰色シルト土が混じり、炭化物ブロックを少量含んだ褐色砂質土が用いられていた。

C－３層は、盛土部との層間に、小礫を多量に含む砂利層を挟み、不整合が見られた。盛土部との間に明確な時間差を認めることができるだろう。

この段階の基壇部は、平面的に捉えることができず、断面図のある東西方向でしか把握し得ない。これによれば、次段階に比べ基壇西側は50cm、東側は80cmほど小規模である。一方、南北方向の記録はないが、後述する南土坑の20～30cm外側に、土坑主軸と平行する向きで土色の変化するラインが確認されており、これが第１段階の基壇面縁辺と推測される。北側は、後述の北土坑が次段階の縁辺付近に位置することから、北側の変更はほとんどなかったものと考えたい。

以上から推測される第１段階の基壇上面の規模は、主軸方向で260cm、南北方向で300cmである。

基壇部では、主軸線を中心として左右に、東西方向の溝状土坑が一対確認された。一間社流造の本殿を載せるための基礎（根太）を据えた跡と思われる。規模は、南側の土坑（以下「南土坑」）が長軸282cm、



第331図　鷲神社社殿部（2）

短軸50cm、深さ27cmで、北側の土坑(以下「北土坑」)は長軸253cm、短軸42cm、深さ8cmである。軸方向は南土坑がN－67°－W、北土坑がN－59°－Wで、前者は基壇部主軸に対してほぼ平行、後者はやや北に振れている。基壇部主軸から土坑の距離は前者が120cm、後者は西側で200cm、東側で170cmである。

また、段階として捉えてはいないが、B－1層とC－1層は不整合で、盛り方においても明瞭な差異が見られた。B－1層は、C－1層以下に比べて相当雑に盛られており、つき固めて丁寧に盛った様子がないことから、C－1層の頂部が基壇面となっていた時期を想定できる。

この他、基壇部西側では、底面が摺鉢状の掘り込みが見られる。これを埋めたD－2層が水成堆積層であることから、この掘り込みは溝状であったと推測される。

C－1層頂部と溝状の掘り込みが同時か否かの判断はつかないが、B層とC層の不整合面の存在からは、第1段階の基壇面が創建時のものとはならないことは明白である。

＜第2段階＞　A層

この段階の基壇部は、断面図および等高線図で示したとおりで（第329・330図)、主軸方向410cm、南北方向500cmの平坦面をもった、盛土造成面から60cmほどの高まりである。北東、南東隅は後世の攪乱を受け、基壇部や貼石（後述)、礎石の一部が失われている。

基壇部中央は第1段階と共有しながら、北側を除く三方に盛土し拡張している。拡張部の土層は、しまりのほとんどない瓦礫の層で、観察し得た中ではもっとも新しい。

正面の基壇部側面は河原石（以下「貼石」)が2～3段に貼られている。両端では、基壇部とともに上部が大きく壊されており、1段しか確認されていない。貼石には長軸10～30cmほどの石が用いられ、面積の広い面を正面に向けている。

第2段階の基壇上には本殿用の板石、覆屋用の玉石の2種の礎石が据えられていた。板石は前段階と共有された基壇面の中央東寄りに、また玉石は拡張部分に配置された。

基壇中央やや東寄りでは板石が、南北方向に5列並べて敷かれていた。用いられた石材は、厚さ6～8cm程度、幅30cmの材質不明の截石で、90cmと65cmの長方形タイプ、30cmの正方形タイプの3種がある。5列並んだもっとも東側と西側の石列は、90cmと30cmの石材を組合せ、南北に210cmの石列を成す。東から3・4列目は90cmの長方形石材のみで、もっとも東側と西側の石列の両端に合わせて並べ、結果として中央には30cm分の隙間ができる。東から2列目は両端合わせで並べられるが、65cmの石材が用いられているため、隙間は80cmとなる。全体は方形の石畳状となり、その範囲は東西2.18m×南北2.13m、広さ約4.6㎡となる。

玉石の礎石は一部欠落するものの、基壇部周縁に板石を囲むようにして、4×4間分が確認されている。玉石は径40cm内外のものが用いられ、最大は南西隅の石で50×30cm、最小は西辺中央の石で30×26cmである。ただし、北西隅では例外的に45×40×8cmの四角形の石（材質不明）であった。玉石は、正面（東辺）を除く三辺では比較的整然と並ぶが、正面は基壇部自体が攪乱を受けており、欠落が見られる。各々の玉石の中心間の距離は、約90cmである。

覆屋は、その礎石（玉石）が基壇拡張時に据えられていることから、この段階に建築されたものと考えられる。

また、時期は確認していないが、神社はその後コンクリートによる基壇部の保護を行っている。保護は二箇所で見られ、一つは基壇部自体の保護で、もう一つは礎石の保護である。

調査後、これらの石は氏子の方々によって、新宮地へ残らず納められた。

出土遺物はごく少量で、基壇表層より寛永通寶2点、文久永寶1点（第332図）が検出されたのみで、他はすべて近現代のかわらけや茶碗片であった。

方形区画と鷲神社

以上やや煩雑な記述となったが、まとめると下記のようになろう。

① 区画溝（第８・９号溝）と鷲神社社殿部は、方向と範囲がほぼ一致する。

② この区画内は旧地表面を整地し、盛土による造成を行っている。

③ この盛土造成の上にはさらに盛土がなされ、鷲神社本殿が建築されていた。また、拝殿は盛土造成の上に直接建てられていた。

④ 本殿は、角材を根太とする上に載っていた第１段階と、基壇が拡張され、板石が敷かれた上に載り、玉石を礎石とする覆屋を伴った段階が認められる。覆屋と拝殿の構築については明らかとし得なかったが、拝殿は第２段階の覆屋と同時ではないかと思われる。

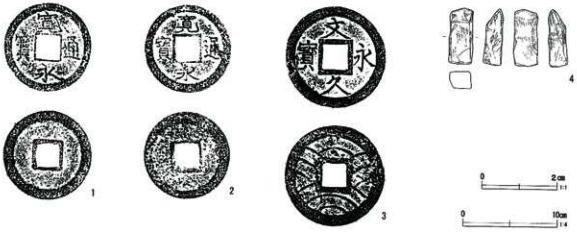
ということになろう。

ここで問題となるのは方形区画（盛土造成・区画溝）と鷲神社跡の関係である。

鷲神社については、『新編武蔵風土記稿』飯積村の項を見ると、「鷲明神社　村の鎮守なり、萬治年中の勧請にして、享保五年二月九日正一位の神位を請ると云」とある。また、『埼玉の神社』入間・北埼玉・秩父（1986　埼玉県神社庁）には、「本山派上田山宝蔵寺金剛院が、万治二年鷲宮から同院の境内に勧請したという。」社伝が紹介されている。さらに、同書によれば、正一位の宣旨を受けたのは享保四年（1719）一一月三日、相殿の稲荷社に対する本宮の伏見稲荷大社から、天保八年（1838）七月一日に分霊証書（現存）が出されたとある。

調査の所見からすると、盛土造成の最上層と神社基壇部の最下層は不整合面となっており、構築時期には明らかな違いが認められる。加えて、別項で既述したように、区画溝（第８・９号溝）からは16世紀末の遺物が出土しており、万治二年（1660）の勧請という社伝とは60年以上の開きがある。

以上のことから、方形区画は戦国時代末頃の構築で、神社の創建に先行する構造物と判断できる。それでは、この盛土造成を伴う区画がどのような性格のものかというと、第２次調査区の第１号溝（これ



第332図　鷲神社跡出土遺物

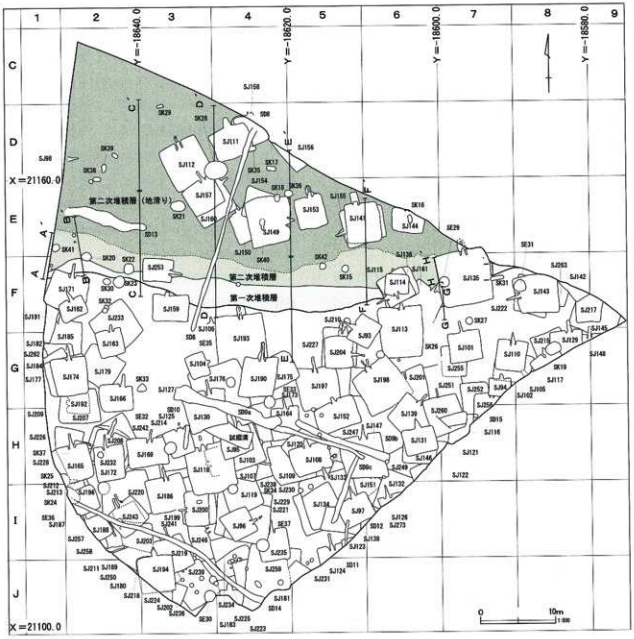
第131表　鷲神社跡出土遺物観察表（第332図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	古銭		径3.35×2.9厚0.2重3.0									寛永通宝	236－4
2	古銭		径2.3厚0.1重2.9									寛永通宝	236－4
3	古銭		径2.6×2.8厚0.1重3.2									文久永宝	236－4
4	石製品	砥石	長5.9幅2.4厚1.8重43.2									神社	235－1

も盛土された方形区画か）と同時期の別の区画という以外、明らかにすることはかなわない。

方形区画の盛土内や区画溝内からは、先行する神まつりや信仰を示す遺物の出土はないが、方向性や範囲の一致に見るように、鷲神社の創建は、周囲から小高く盛土、造成された区画を十分に意識した上に為されたものといえよう。あるいは、区画と神社の創建は同時のもので、溝の遺物は混入とも考えられる。その時期は万治二年以降、天保八年（あるいは享保四年）以前となろう。

7．流路跡



第333図　流路跡全体図

第３・４次調査区の南側は、遺構が密集して築かれ、その地山は、ややしまりのある灰色や褐色の砂質土であった。これに対し、調査区北側では、褐色の粗粒砂が広く分布していた。その範囲は、Ｆグリッドを南限とし、北側および東西方向は調査区域外に及んでいる。

調査の結果、褐色の粗粒砂の範囲は、５世紀中頃以前の窪地（谷）であることが判明した。また、この窪地の斜面部には、５世紀第Ⅲ四半期から６世紀第Ⅱ四半期の間、土器廃棄が行われていること、また、その後洪水がおこり、６世紀後半頃までには窪地が埋まったことが明らかになった。

以下ではこの窪地を「流路跡」と呼称し報告する。

（１）流路跡の概要

遺構確認ではＥからＦグリッドにかけて、東西方向に延びる土質の異なった数条の帯が確認された（第333図）。この帯状分布を境に南側は、比較的粘性の強い褐色や灰色砂質土が堆積し、北側は非常にしまりの弱い褐色粗粒砂が分布していた。これらの土層の堆積状況を把握するため、同図に示したように、グリッドライン２～７において、帯状分布と直行方向に10m 間隔でトレンチを設定した。この結果以下の事実が明らかにされた。

① 南側に堆積している灰色砂質土は水平堆積をしており、Ｆライン付近で北側へ落ち込んでいる

② 灰色砂質土は落ち込み部分においても水平堆積を崩していない

③ 窪地には初め、しまりの強い黄褐色粘質土の一群（第一次堆積層）が堆積していること

④ その後、しまりの弱い褐色粗粒砂（第二次堆積層）が厚く堆積していること

⑤ 第二次堆積層には不整合面が見られ、地滑りが起こっていること

さらに、これらの断面観察で得られた事実をもとに、堆積土の平面的調査を行った。その結果、さらに以下の事実が明らかになった。

⑥ 第一次堆積層中では、５世紀第Ⅲ四半期から６世紀第Ⅱ四半期の土器が大量に出土していること

⑦ 土器は、第一次堆積層の形成途中で出土していること

⑧ 褐色粗粒砂の間層には、黄褐色粘質土の薄い層が見られること

⑨ 第一次堆積層中にはチャートの転石が含まれていること

⑩ 第二次堆積層は榛名山の角閃石安山岩が見られたが、土器はほとんど含まないこと

①や②からは、５世紀第Ⅲ四半期以前の調査区北側の窪地には、河川が流れており、集落形成以前の南側の自然堤防を攻撃していたことがわかる。また、③からは、窪地には土層が安定して供給されており、比較的穏やかな堆積環境だったことが理解される。さらに、⑥からは、斜面地への土器廃棄は、集落形成とほぼ同時に始まっていること、また、⑦からは、自然堤防への攻撃が終り、穏やかな堆積環境に変化してしばらく経ってから土器が廃棄（集落が形成）されたということがわかる。

第一次堆積層形成後、窪地には、第二次堆積層と呼称した、褐色粗粒砂が分厚く堆積した。第一次堆積層との土質の差は明瞭で、運搬営力の相当強い流れ（＝河川の氾濫）が想定される。

第253号住居跡に見るように、６世紀第Ⅳ四半期頃には、すでに第二次堆積層に竪穴住居跡が掘り込まれていることから、この層の形成は、６世紀中から後半頃と判断される。さらに⑧によれば、その形成は一度ではなく、複数次にわたっており、それぞれの洪水の間には、土層を安定して供給した時期が存在している。

ところで、⑨・⑩で見たように、第一次堆積層にはチャートの転石が、また、第二次堆積層には角閃石安山岩が含まれていた。チャートは、本遺跡付近では足尾山地、筑波山北部や八溝山地、秩父山地に分布する。粒径２～３cm ほどの転石であることや、本遺跡の立地と環境から推せば、足尾山地のものが渡良瀬水系によってもたらされたと判断するのが穏

当である。つまり⑨や⑩は、流路跡に流れていた河川が、5世紀後半から6世紀前半以前は渡良瀬水系であり、6世紀後半には、利根川水系だった可能性を示している。すなわち、6世紀前半から後半頃というごく限定された期間内に、渡良瀬水系から利根川水系への水系変化が起こった可能性がある。

（2）地震の痕跡

流路跡第二次堆積層では、地震の痕跡を確認した。一つは地滑り、一つは液状化の痕跡（噴砂）である。

地滑りは、平面的には、Fライン付近を東西方向に走り、両側は調査区域外におよんでいる。また、断面的には、第334・335図A－A′からF－F′で土層の不整合面が観察され、確認面における、土質の異なる東西方向の帯状範囲と一致していた。

また、地滑りは、調査区東側で第135号住居跡の床面や壁を壊しているのが平面的、断面的に確認されている。同住居跡では、これと並行する噴砂も確認している。噴砂は地滑り同様に、住居跡床面や壁を壊しており、検出状況から見て、同じ地震の痕跡と思われる。

地滑りと噴砂の形成時期（＝地震の年代）は不明であるが、7世紀第Ⅲ四半期の第135号住居跡の床面を壊していることから、上限はこの時期に絞られる。また、第8号溝跡（中世末から17世紀中頃）との接点では、同溝跡の損傷が見られない。以上二点から、地滑り、噴砂の形成要因となった地震は、7世紀第Ⅲ四半期以降17世紀中頃くらいまでのものと判断されよう。

（3）遺物の出土状況

流路跡では、第一次堆積層や第二次堆積層から遺物が出土した。特に、第一次堆積層中では、大量の遺物が出土している。流路跡の調査は、まず土層観察用のベルトを南北に設定し、この脇にトレンチを掘削した（第333図）。この段階で土器の集中出土層を確認したため、第336図で示したように、1×1mの小グリッドを設定して、北西から1～100の№を付し、小グリッドごとに掘削を行った。

第一次堆積層出土遺物の分布範囲は、E・F－1～7グリッドにかけて、流路跡の立ち上がりからわずかに離れた斜面地に、東西方向に広がっている。出土遺物の内容は、その大半は土師器で、このほかに須恵器や土製品（支脚、土玉）、石製品（砥石、臼玉）、鉄製品、貝巣穴痕泥岩などが見られる。

出土遺物の総重量は333,713gで、その内訳は、土師器330,283g、須恵器2,173g、土製品355g、石製品449g、鉄製品450gである。重量的には、99％が土師器で、須恵器やその他の遺物は、すべて合わせても1％でしかない。

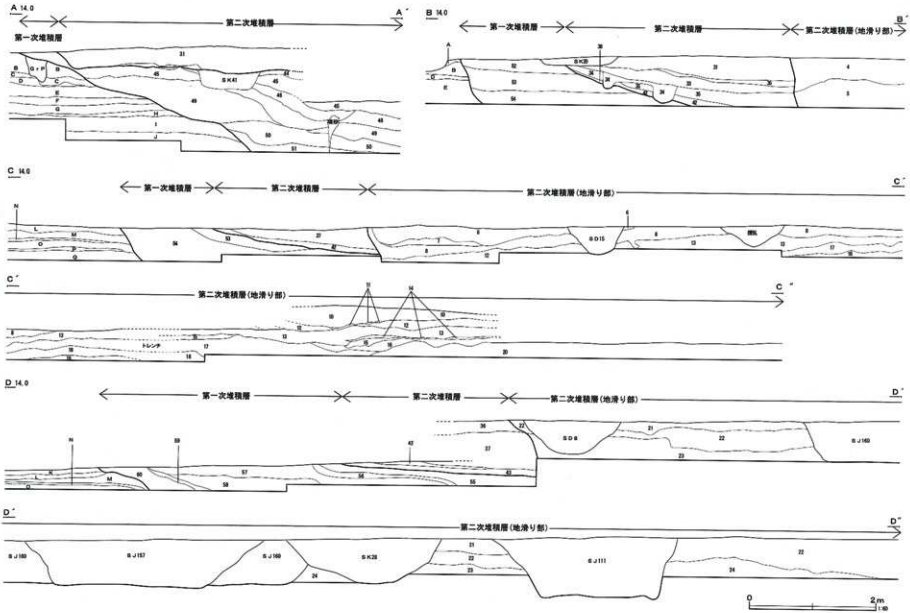
第132表には、坏類（土師器坏・高坏）、甕類（土師器甕・甑・壺）のグリッド別重量を示した。坏類の総重量は50,521gで、甕類の総重量は237,869gである。

同表によれば、坏類は、E－2、F－3～6グリッドで5,000gを越えており、その出土量の多さがうかがえる。8,000～9,000gを出土したF－5・6グリッドは、相当な出土量と言えるであろうが、F－4グリッドの16,657gという値は、突出している。まず、坏類の重量という点では、F－4グリッドに特異性がうかがえよう。

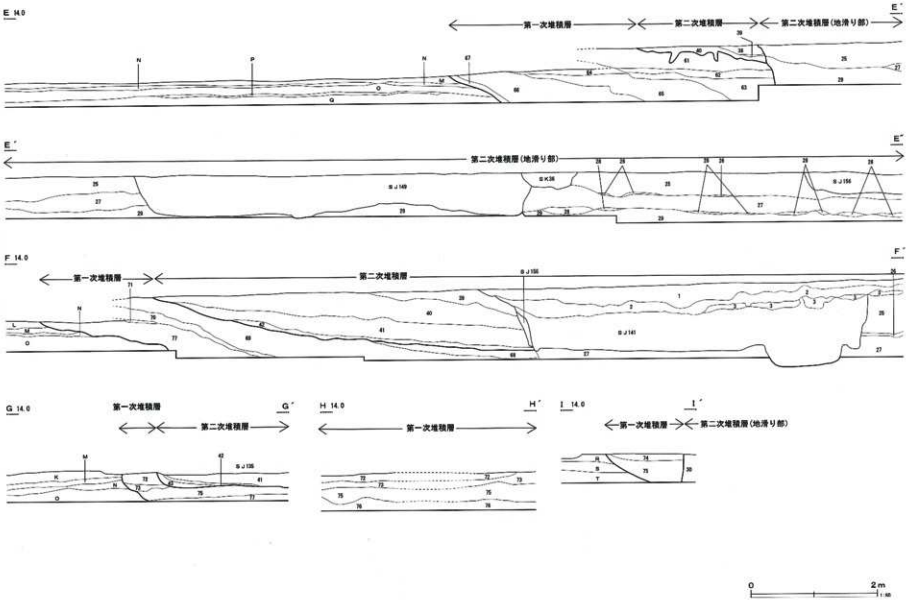
一方、甕類は、E－2でもっとも多く出土し、F－5やF－4がこれに次ぐ。坏類に比べ、個体毎の重量偏差が大きく、重量がそのまま出土個体数の多さを示さないが、E－2、F－4・5の突出した重量は認めなければならないだろう。

坏類と甕類のグリッド単位の重量を見ると、ある程度の相関を認めることができる。特にF－4～6では、両者の重量は呼応しており注目される。

第337図には、坏類、甕類それぞれの小グリッドごとの重量分布を示した。左は坏類、右は甕類である。坏類の分布を見ると、E－2の86、E－3の81、F－4の21・28・38・69、F－6の37・48小グリッドで、最大階層である1,000g超の集中が見られる。このうち、特にF－4の28・38小グリッドでは、1,500g超の出土が見られ集中度が著しい。小グリッ



第334図　流路跡土層断面図（1）



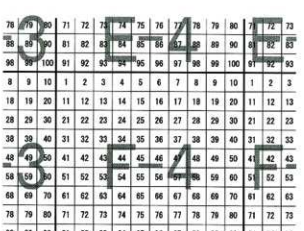
第335図　盛土層断面図（2）

流路跡　第2次堆積層（地滑り部）
1　明褐色土　砂質　粘性弱
2　暗褐色土　砂質
3　明黄褐色土　粘性強　粒子粗
4　暗褐色土　砂質　粒子極く粗
5　黒褐色土　砂質（粗砂粒）
6　黄褐色土　砂質　土器少量
7　黄褐色土　粘土質
8　褐色土　砂質
9　明褐色土　シルト質と褐色砂質土混層
10　褐色土　砂質
11　明褐色土　砂質　下位に酸化鉄沈着
12　暗褐色土　砂質（粗砂粒）
13　褐色土　シルト質
14　明褐色土　砂質　粘性やや強
15　黒色土　砂質　褐色砂質土多量（粗砂粒）
16　褐色土　砂質（粗砂粒）
17　黒褐色土　砂質（粗砂粒）
18　黄褐色土　粘土質
19　暗褐色土　砂質
20　褐色土　砂質（細砂粒）
21　灰色土　砂質　炭化物少量
22　褐灰色土　砂質　酸化マンガン多量
23　灰色土　砂質　褐灰色シルト土多量
24　黄褐色土　粘土質　砂多量
25　褐色土　砂質　黄褐色シルト土少量
炭化物多量
26　黄褐色土　シルト質
27　暗灰褐色土　砂質
28　黄褐色土　シルト質
29　暗褐色土　砂質
30　黄褐色土　シルト質

流路跡　第2次堆積層
31　褐色土　しまり極く強　粒子粗い
32　明褐色土　粘土質　粘性強　しまり弱
33　暗褐色土　炭化物少量　粘性やや強　粒子粗い
34　暗褐色土　粘性弱　粒子粗い
35　灰褐色土　砂質
36　明灰色土　砂質
37　褐灰色土　砂質　褐灰色シルト土多量
38　褐色土　砂質　黄褐色シルト土・炭化物少量
39　黄褐色土　シルト質
40　明灰色土　砂質
41　灰褐色土　砂質
42　黄褐色土　炭化物少量　粘性強　粒子粗い
43　明褐色土　焼土・炭化物少量
44　黄褐色土　粘土質

流路跡　第1次堆積層
45　明褐色土　炭化物少量
46　暗褐色土　粘性やや強　土器片多量
47　暗褐色土　炭化物少量
48　明褐色土　砂ブロック少量　炭化物少量　粘性強
49　暗褐色土　焼土・炭化物少量　粘性強
50　明褐色土　焼土・炭化物少量　粘性強
51　明褐色土　暗灰褐色土少量　砂ブロック少量　粘性強
52　暗褐色土　炭化物少量　粒子粗い
53　暗褐色土　炭化物微量　粘性弱　粒子粗い
54　暗褐色土　炭化物少量
55　暗褐色土　炭化物少量
56　黄褐色土　粘性強
57　暗褐色土　焼土ブロック・炭化物少量
58　暗褐色土　砂質　炭化物少量
59　黄褐色土　粘性強
60　明褐色土
61　明褐色土　粘土質　粘性強
62　明褐色土　焼土・炭化物少量
63　明褐色土　しまり極く強
64　黒褐色土　炭化物極く多量
65　暗褐色土　焼土ブロック・炭化物少量
66　暗褐色土　炭化物多量
67　黄褐色土　粘性強
68　暗褐色土　炭化物少量
69　暗褐色土　炭化物少量　粘性強
70　黄褐色土　粘性強
71　黒褐色土　炭化物極く多量
72　明褐色土　しまり極く強
73　暗褐色土　炭化物少量　粘性強
74　明褐色土　しまり極く強
75　暗褐色土　炭化物少量
76　暗褐色土　黄褐色粘質土ブロック少量　粘性強
77　黄褐色土　粘性強

自然堆積部
A　暗黒色土　炭化物多量　粘性強
B　黄褐色土　粘性強　粒子粗い
C　暗褐色土　炭化物少量
D　褐色土　粘土質
E　明灰褐色土　砂質　粘性弱
F　明褐色土　粘性強
G　黄褐色土　炭化物少量
H　暗褐色土　炭化物少量　粘性強
I　明褐色土　粘性極く強
J　黄褐色土　粘性極く強
K　暗褐色土
L　暗褐色土　砂質　炭化物微量　しまり強
M　明褐色土　砂質
N　黄褐色土　粘性強
O　暗褐色土　砂質
P　黄褐色土　粗砂粒少量　粘性強
Q　暗褐色土　砂質　炭化物微量
R　暗褐色土　明褐色粘質土ブロック少量
S　暗褐色土　炭化物少量
T　暗灰褐色土　砂質　炭化物少量



第336図　小グリッド区画図

ド単位で見たとき、F－4の28・38の特異性を指摘できる。

一方で注意されるのは、分布の最小階層1～30gと次の階層31～80gの多さである。両階層はそれぞれ、本遺跡で出土した最も軽量な坏蓋模倣坏の、4分の1個体と2分の1個体ほどの重量であることを表す。分布を見ると、大半の小グリッドは、坏1個体未満を示す160g未満の階層によって占められていることがわかる。すなわち、坏類の分布から見る出土状況は、F－4などの異常集中を含む数箇所を除けば、基本的には破片の状態でまばらに散っているということが理解されるだろう。

次に、甕類の分布を見ると、E－1の78、E－2の73・84小グリッドのほか、F－4北東部、F－5北西部、F－6北西部等でやや分布の濃い箇所が見られる。しかしながら、全体的に面的な広がりを見出しづらく、最大階層の4,000g以上はあくまで点状の分布である。すなわち、甕類の分布は、E－1、E－2、F－4グリッドなどでわずかに、複数の小グリッド間で多量に出土している地点を除けば、集中的な出土はなく、基本的には1個体（多くても2,3個体程度）で出土しているということが理解され

第132表　流路跡出土遺物計測表

グリッド	重量（g）			個体数	
	坏	甕	合計	坏（実測）	坏（最低）
E－1	2,002	21,835	23,837	4	9
E－2	5,741	42,638	48,379	13	22
E－3	2,109	15,979	18,088	5	5
E－4	3,180	14,537	17,717	11	3
E－5	346	16,138	16,484	2	2
E－6	602	10,313	10,915	6	2
F－1	27	0	27	0	0
F－2	1,277	5,666	6,943	2	2
F－3	5,090	15,241	20,331	4	16
F－4	14,160	33,802	47,962	18	55
F－5	6,754	34,262	41,016	0	15
F－6	8,137	19,428	27,565	22	40
F－7	1,096	8,030	9,126	2	2
計	50,521	237,869	288,390	89	173

るのである。

坏類と甕類のグリッドごとの重量が、相関していることは、先に確認したが、これを小グリッド単位で眺めると、E－1、E－2、F－4で分布が一致するほかは、両者は特に一致を見せない。換言するなら、E－1、E－2、F－4グリッドでは、両者はまとめて遺棄ないし廃棄された可能性があるが、このほかは、両者の廃棄箇所は特定されたものでなく、任意の地に廃棄されたと言えるだろう。

ところで、土師器坏類は甕類と異なり、個体ごとの重量偏差が小さいことから、坏1個体ごとの平均重量から、最低個体数の算出が可能である。

流路跡で出土した土師器坏の組成比率は、坏蓋模倣坏74％、坏身模倣坏5％、比企型坏4％、小針型坏7％、有段口縁坏2％で、他地域の土器である内面に放射状のミガキをもつ赤彩椀6％、下総地域から栃木県南部に分布する、口縁部と体部に稜のないヘルメット型の坏3％であった。

それぞれの土師器坏の、完形品1個体あたりの平均重量は、口径12cm程度の坏蓋模倣坏で約170g、口径13～14cmの坏蓋模倣坏で約210gである。また、このほか、坏身模倣坏220g、小針型坏270g、比企型坏210g、有段口縁坏190gで、赤彩椀240g、ヘルメット型の坏320gであった。

それぞれの組成比率に重量を乗じた数値は223gで、これが流路跡出土土師器坏の1個体の平均重量となる。

第338図左では、小グリッドごとの実測個体を数字で、また、破片資料を重量別にトーンで示した。凡例に示した階層は、220g単位で区切ることで坏類の、小グリッド毎の最低個体数を表せるようにした。よって、220g以下の小グリッドは、最低個体数については何も言うことができないため、トーンで示してはいない。一方、最低個体数については、最少階層の220～440gで2個体、また、最大階層の1,101～1,320gは、6個体出土したことを約束する。

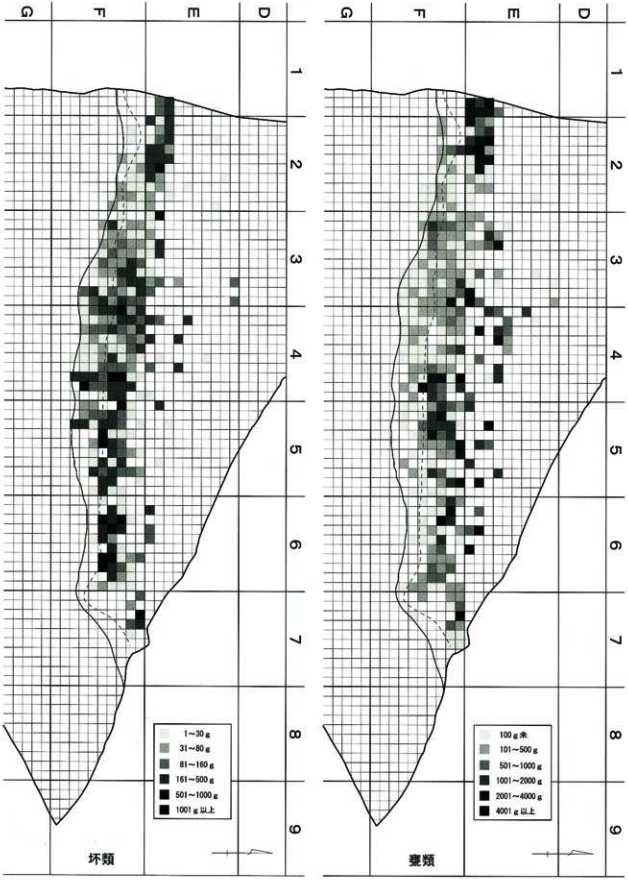
また、同図右では、小グリッドごとに、この破片資料の重量から割り出した最低個体数に、実測個体数を合算し、出土個体数を数字のみで表した。

両図によれば、坏類の最低個体数は、F－4・28、38グリッドで24個体と異常集中を見せるほか、E－2、F－6グリッドでもやや集中域が見られる。F－4の28・38小グリッドの特異性を追認する形となったが、ノイズを省いた分鮮明になっている。

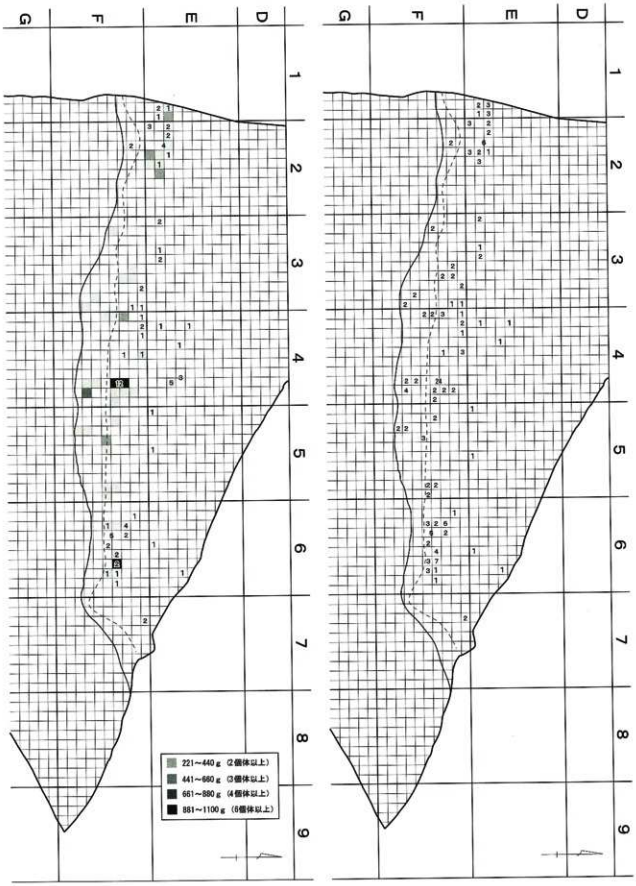
階層の扱い方や見積もり方によっては、個体数は当然増える。また、坏類に含まれた高坏の重量を考慮するなら、個体数は低くなる。以上のような問題はあるが、小グリッドごとの比較には有効であり、ある程度確度のある数値となるだろう。

次に、第340～345図では、第一次堆積層中の遺物出土状況を示し、これらの遺物出土レベルを断面図に投影した。また、第339図には投影範囲（A～H地点）を図示している。なお、出土状況図および投影図に掲載した遺物は、その範囲のすべてではなく、特に密集を見せる箇所、残存率の高い土器群を選択している。

それぞれの地点における投影図を見ると、遺物の出土層位は例外なく、第一次堆積層とした黄褐色粘質土層から出土している。また、遺物の出土レベルは南高北低で、第一次堆積層の傾斜にほぼ一致する。



第337図　流路跡出土土器重量分布図



第338図　流路跡出土坏数個体数

また、出土層位は、いずれの地点においても、地山と第一次堆積層との不整合面から若干浮いた位置から出土している。つまり、これは斜面に土層が堆積して、しばらく経ってから土器の廃棄が始まっていることを意味している。

次に、各地点の遺物出土状況を見てみると、DやG地点のように比較的密集度の高い地点が見られる一方で、その他の地点では、小グリッド毎の出土土器は2～3個体程度であり、密集の度合いもさほど高くない。このような状況を考慮すると、D・G地点などは、やや特殊な状況と言えるのかもしれない。

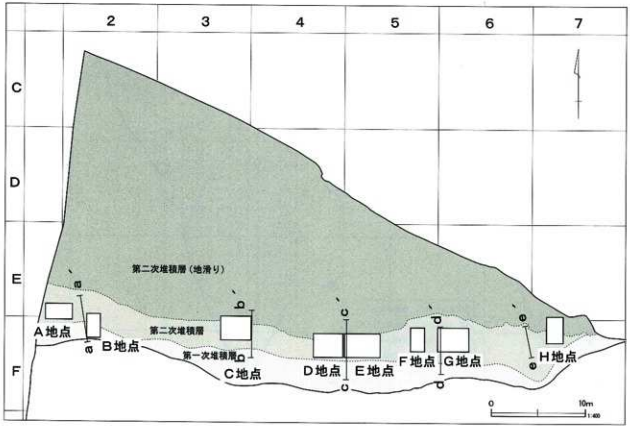
特に、D地点の出土状況を見てみると、土師器甕2個体（239・240）を、土師器坏6個体（199・201・204・213・214・216）と高坏7個体（220・221・224・225・227・229・230）が取り囲み、かつ正位で出土していた。また、186の土師器坏には臼玉2点（251・254）が収められ、周辺にも臼玉11点が散らばっている。

つまりF－4グリッドは、既述のように、重量や個体数、密集度だけにとどまらず、出土状況からも特殊な状況がうかがえる。

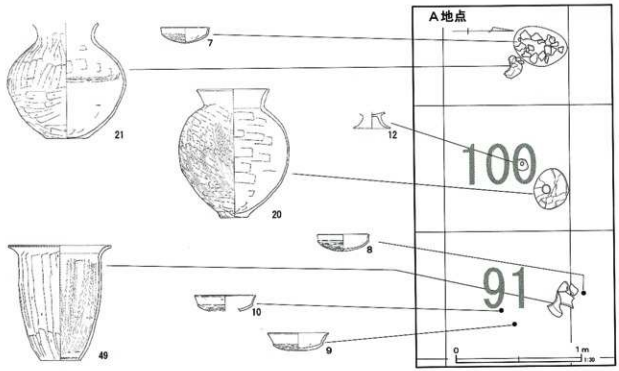
土器の時期を見てみると、5世紀第Ⅲ四半期から6世紀第Ⅱ四半期のものが見られた。5世紀第Ⅲ四半期は、飯積遺跡の集落が興った時期と一致しており、斜面地への土器廃棄行為は、集落形成とともに行われていることがわかる。

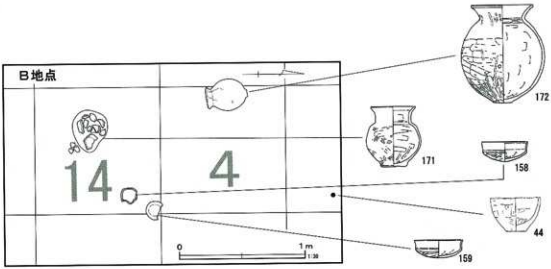
第346～349図には、時期毎の遺物分布状況を示した。それぞれの時期の遺物分布状況を概観すると、5世紀第Ⅲ・Ⅳ四半期は、F－6グリッドで若干の集中を見せるだけで、土師器坏、高坏、甕などが東西方向にまばらに散っている。器種は土師器坏が圧倒的に多く、次いで甕が少量見られる。高坏は全体で2個体出土したのみである。

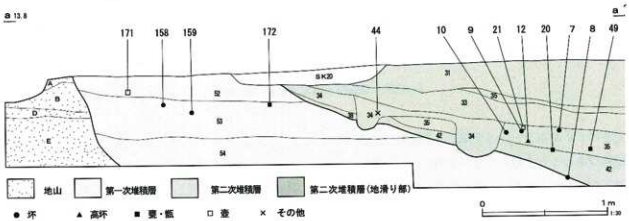
6世紀第Ⅰ四半期は、出土土器量が極端に増える。



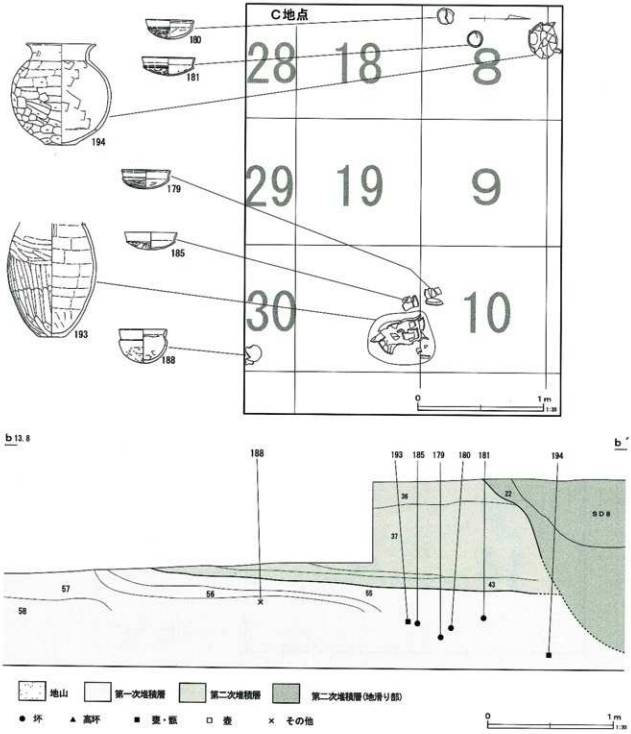
第339図　流路跡出土土器断面投影範囲





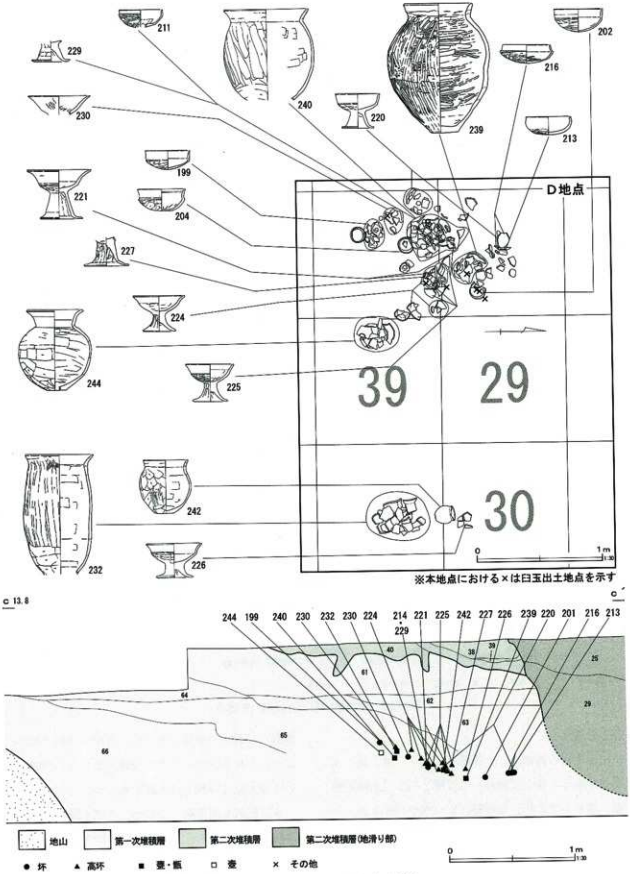


第340図　流路跡土器出土状況（A・B地点）

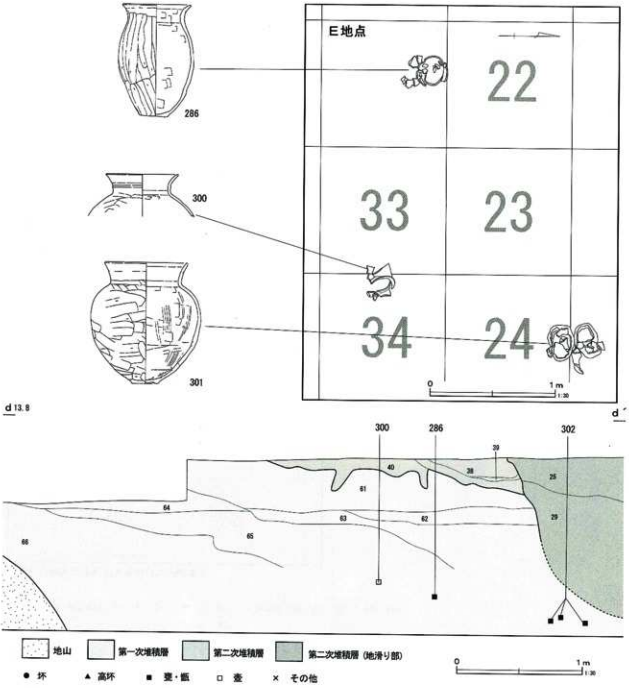


第341図　流路跡土器出土状況（C地点）

先述の５世紀第Ⅲ・Ⅳ四半期が、本時期の二倍の時間幅であることを考えると、この出土量の増加は極端と捉えざるを得ない。この時期の分布状況を見ると、全体的にまばらに散っていた前時期に比べ、各地点に集中箇所が見られるようになる。集中箇所はE－１・２グリッド、F－４・５グリッド、F－６グリッドにおいて見られる。これらの箇所には、先に第342図でも触れた、D地点の土器集中（F－４・５グリッド）も含まれている。一方で、これらの集中箇所の間に、土器がまばらに分布する状況がある



第342図　流路跡土器出土状況（D地点）



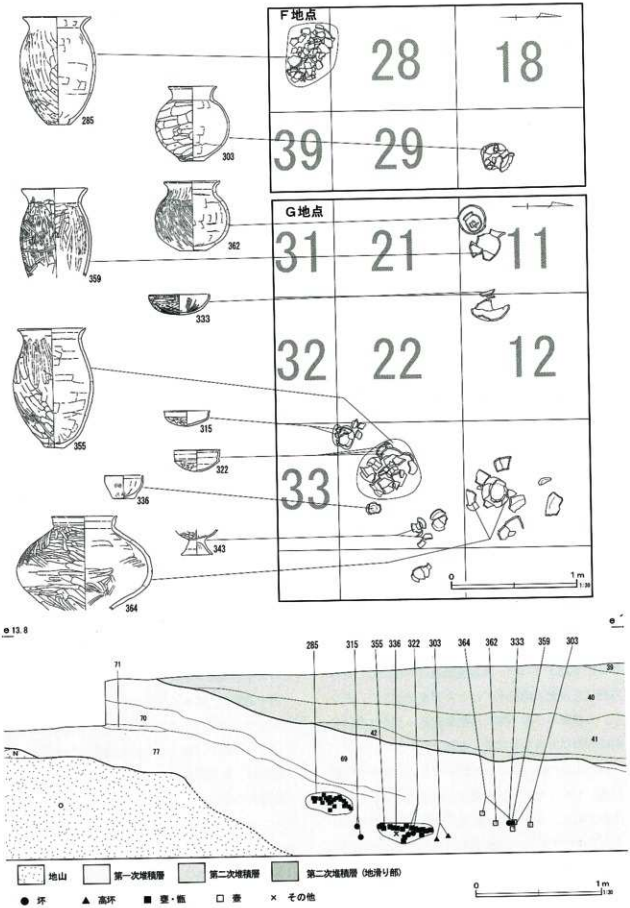
第343図　流路跡土器出土状況（E地点）

のも見逃せない。

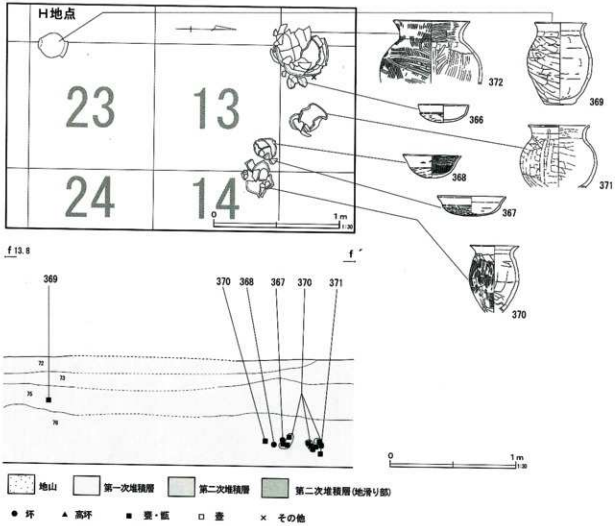
出土土器の器種は、土師器坏、高坏、坩、甕、甑などである。新たに加わった器種として、土師器甑、壺、坩があげられ、前時期に比べややバラエティーに富んでいる。

このほか、土師器高坏の出土量は極めて増加する。ただし、増加の様子は、全体的ではなく、一箇所（D地点）における増加であった。前後の時期に高坏がほとんど見られないことを加味するなら、10個体という出土量は特殊と言えるであろう。

6世紀第Ⅱ四半期になると、再び土器の分布状況は散漫になる。E－3・4グリッドでやや集中を見せるほかは、分布や器種の様子は、5世紀後半のあり方に良く似ている。また、破片であるが、須恵器



第344図　流路跡土器出土状況（F・G地点）



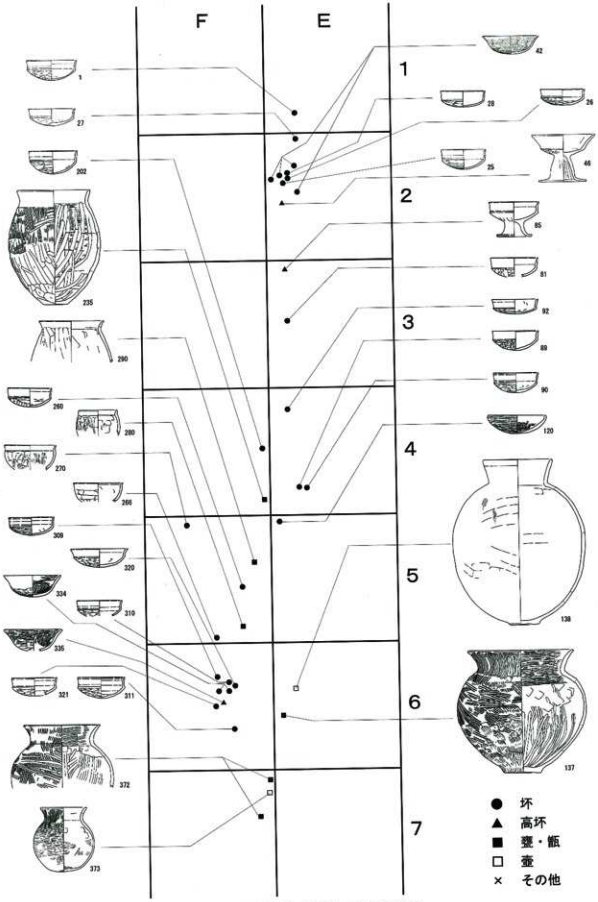
第345図　流路跡土器出土状況（H地点）

坏蓋（410）、鼎（414）が出土している。

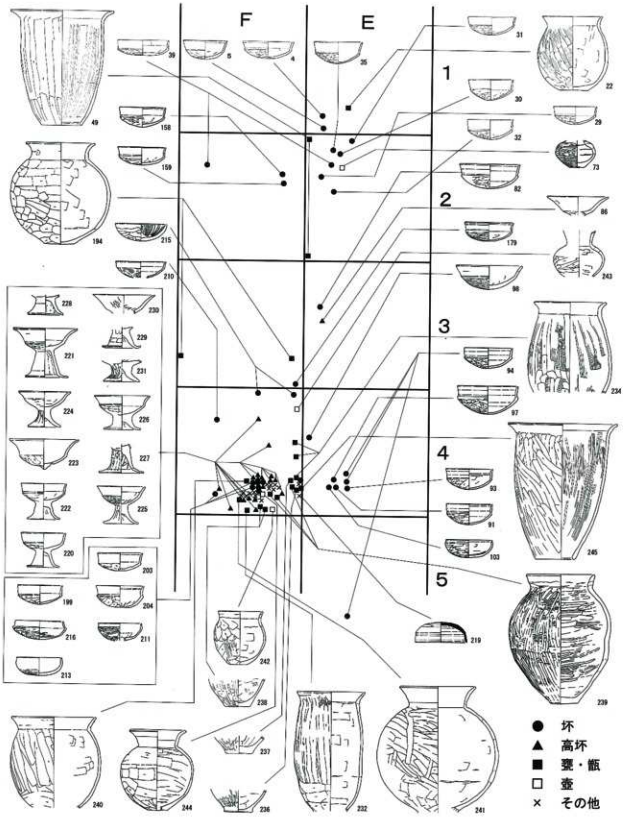
通時的に分布状況を眺めると、土器廃棄の開始期である5世紀第Ⅲ四半期から、終了期である6世紀第Ⅱ四半期までの間、土器廃棄地点の移動は、東西方向にも南北方向にも、ほとんど変化がない。ただし、6世紀第Ⅰ四半期には密集度という点において、前後の時期と異なる様子を看取できよう。

出土土器の器種内容を概観すると、いずれの時期においても、土師器坏や甕などの生活什器が大半を占めている。また、土師器甕や甑などの煮沸具のほとんどすべてには、被熱痕跡やススの付着が見られ、この点からも生活廃棄物という印象が強い。一方で、D地点（F－4・5グリッド）では、土器の密集や高坏の集中、坏に納められた臼玉などが見られ、また、B地点（F－2グリッド）では、焼成後の胴部穿孔された土師器甕（485）が出土しており、非日常的な土器廃棄も連想される。

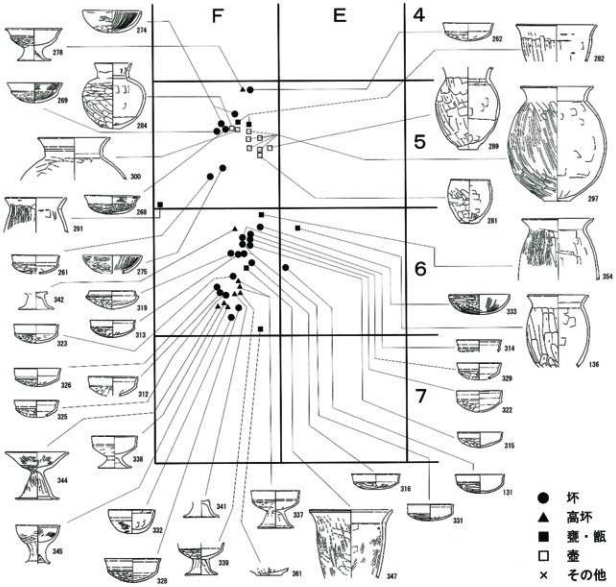
出土遺物は、多かれ少なかれ、廃棄後の水流の影響を受けており、出土状況の読み取りは慎重でなければならないが、以上から、流路跡第一次堆積層出土遺物は、生活什器の日常的な廃棄行為と、儀礼などを含めた意図的な廃棄行為の複合したものと考えたい。また、日常的廃棄行為は、5世紀後半から6世紀第Ⅱ四半期を通じて行われている。一方で、非日常的な廃棄行為は、6世紀第Ⅰ四半期においてのみ行われたと結論付けられる。



第346図　流路跡出土土器分布（5世紀後半）



第347図　流路跡出土土器分布（6世紀第Ⅰ四半期・西側）



第348図　流路跡出土土器分布（6世紀第Ⅰ四半期・東側）

（4）出土遺物

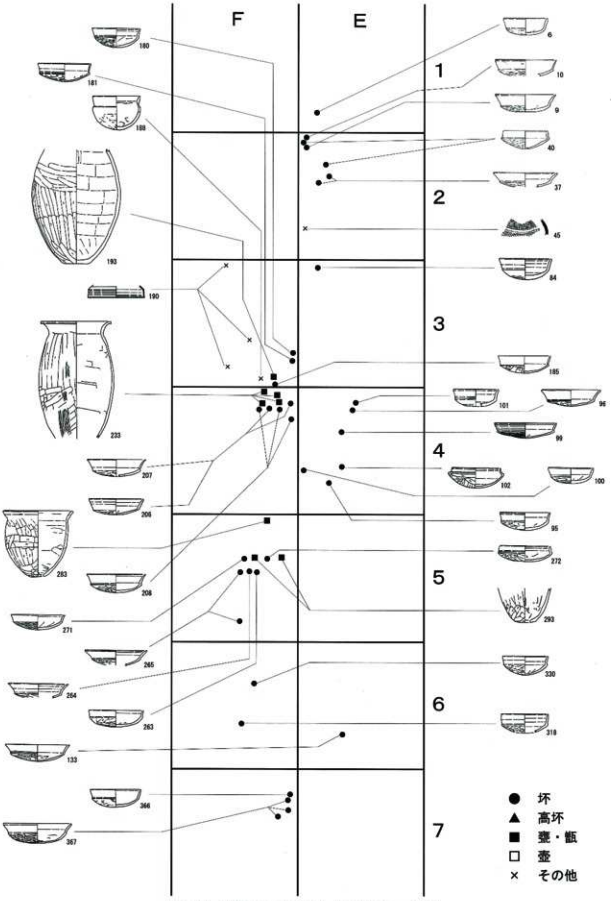
遺物は、土師器、須恵器のほか、土玉、支脚などの土製品、石製模造品や臼玉、砥石などの石製品、鉄鏃を含む鉄製品などが見られた。また、このほか、遺物ではないが、第一次堆積層には直径2～3cmほどのチャートの転石を含んでおり、第二次堆積層には直径5cmほどの角閃石安山岩が含まれているのは既述のとおりである。

第一次堆積層から出土した土師器の器種は、坏・高坏、坩、甑、甕、小型甕などが見られる。産地別に見ていくと在地産の土器のほか、いわゆる比企型坏、小針型坏をはじめ、群馬東部、下総、茨城西部、栃木南部の土器を多く含んでいる。

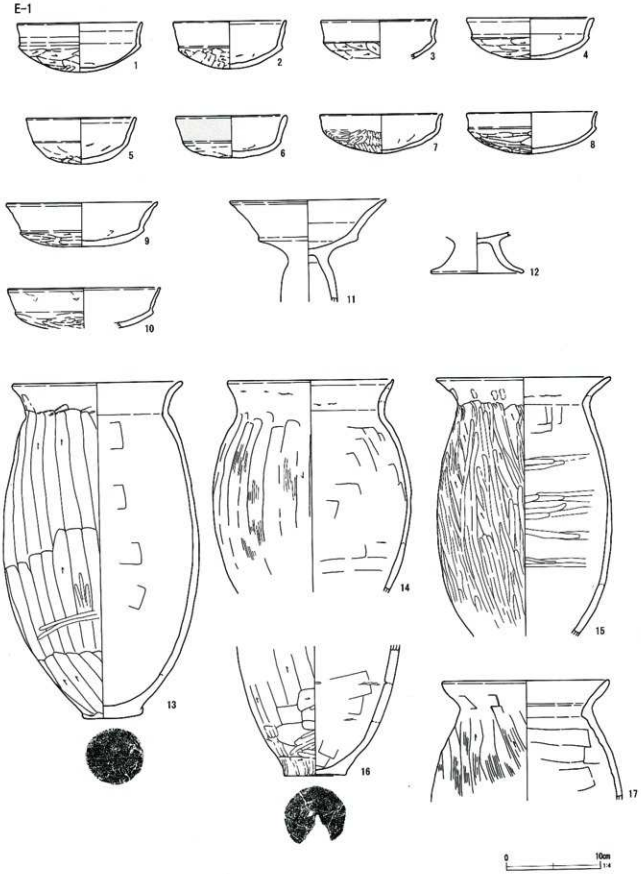
また、須恵器も少量含まれるが、出土比率はごくわずかである。器種としては、坏身・坏蓋・高坏・瓶などが見られる。

出土土器の時期は、土師器、須恵器ともに5世紀第Ⅲ四半期～6世紀第Ⅱ四半期に収まる。図化した土器は332点で、重量的には全体の60％程度である。

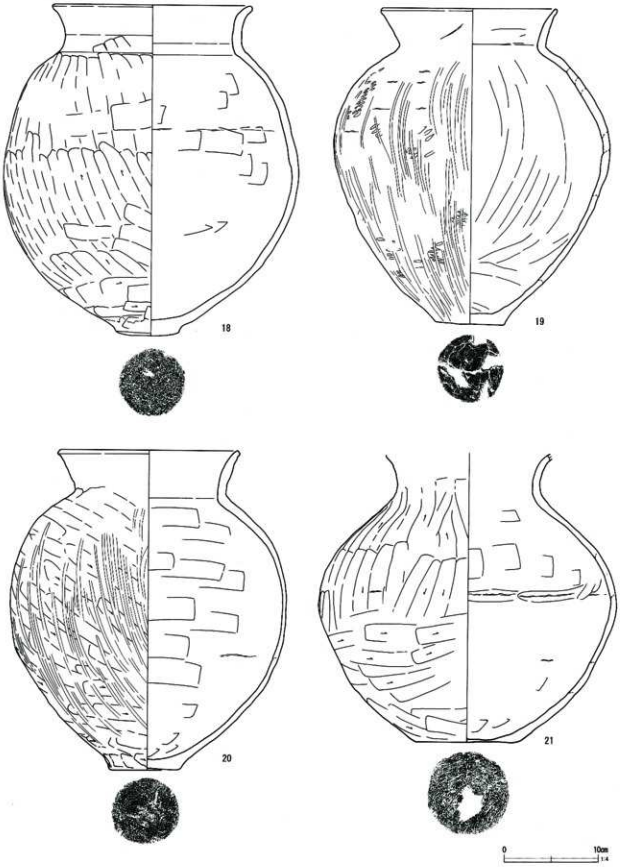
白玉は17点出土しており、F－4グリッドで13点と特に集中を見せる。このほか、土玉は7点、砥石1点、鉄製品7点が出土している。



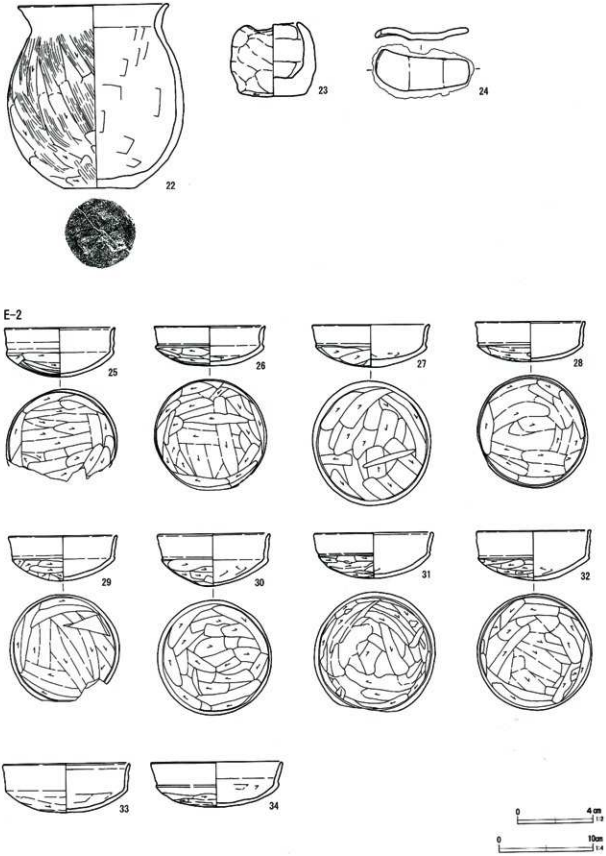
第349図　流路跡出土土器分布（6世紀第Ⅱ四半期）



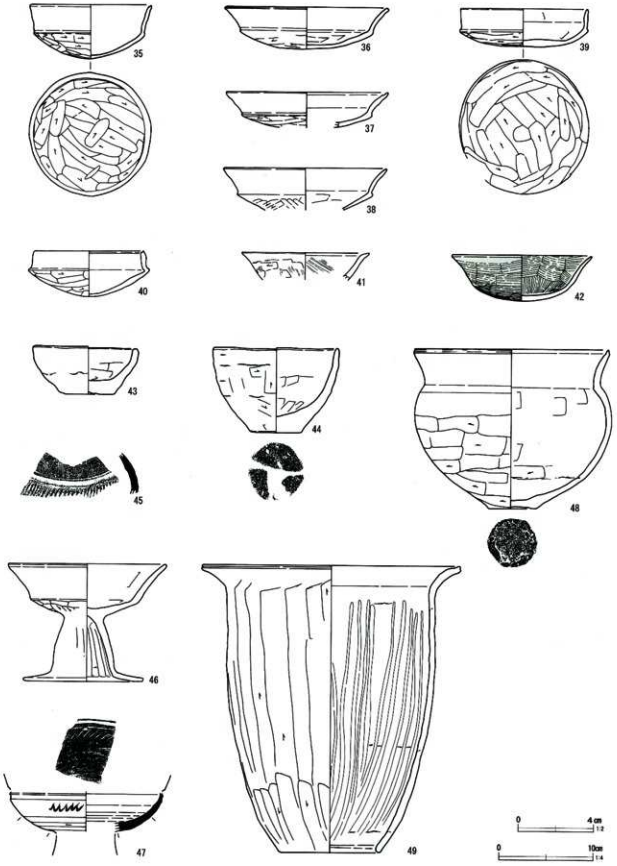
第350図　流路跡出土遺物（1）



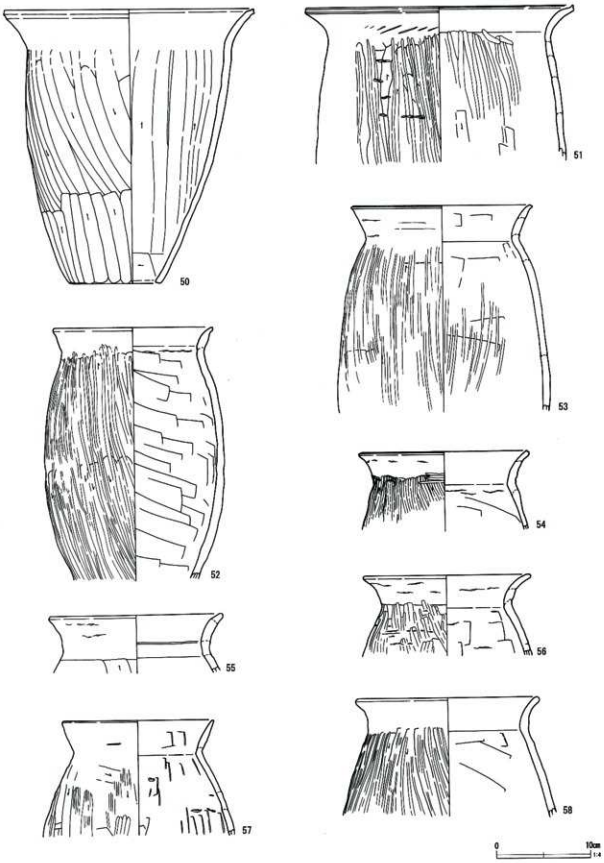
第351図　流路跡出土遺物（2）



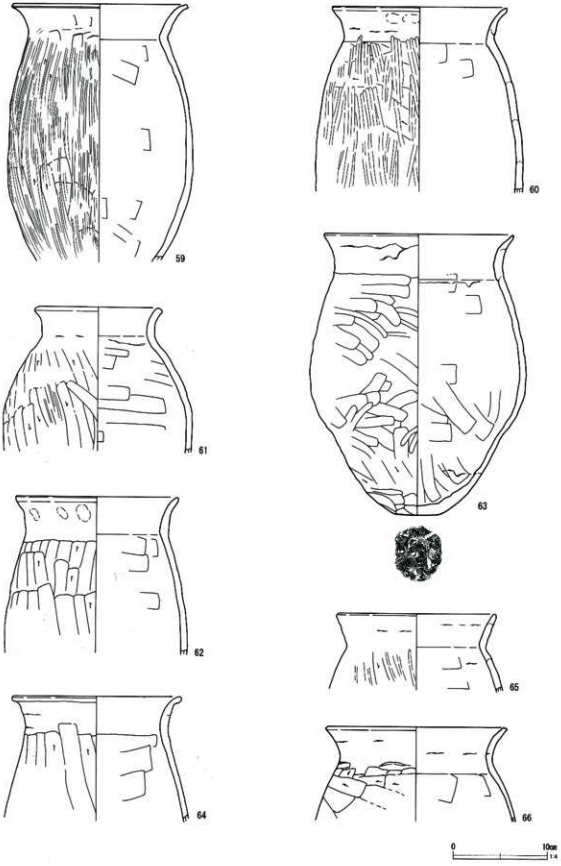
第352図　流路跡出土遺物（3）



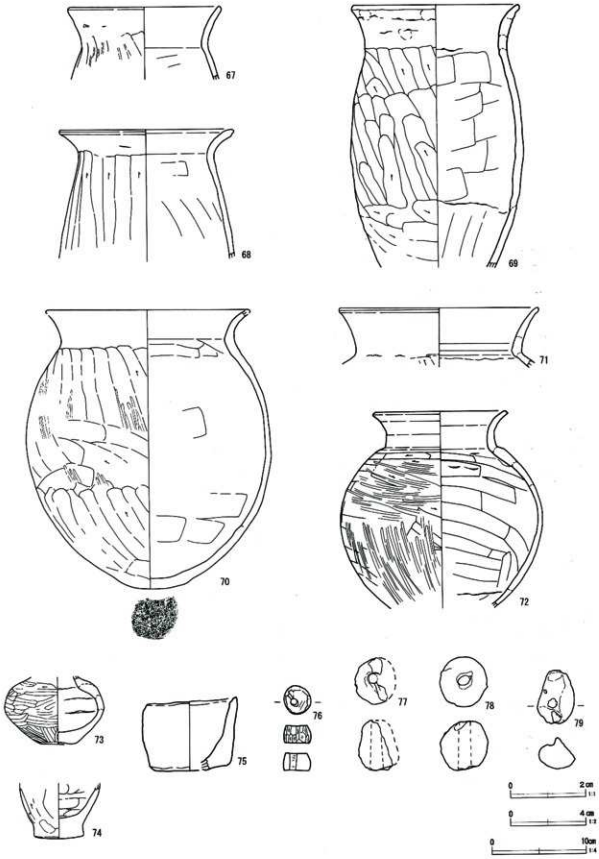
第353図　流路跡出土遺物（4）



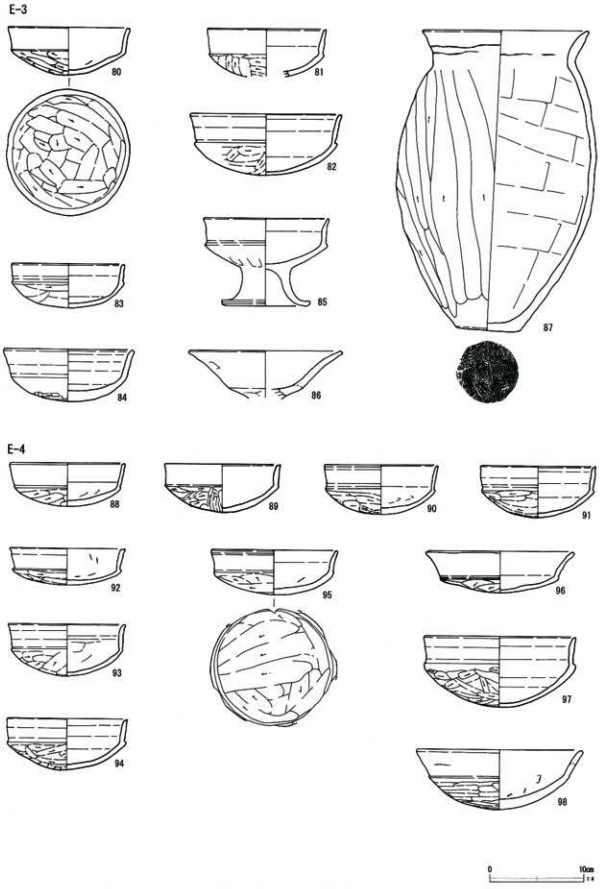
第354図　流路跡出土遺物（5）



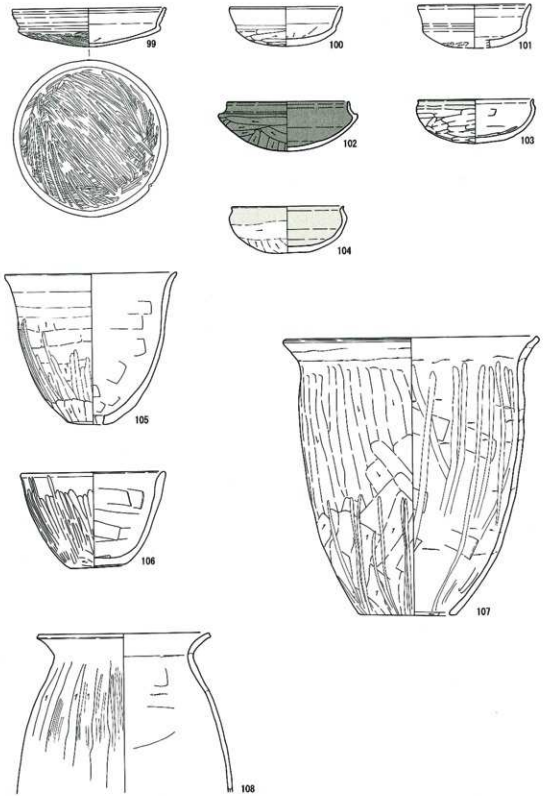
第355図　流路跡出土遺物（6）



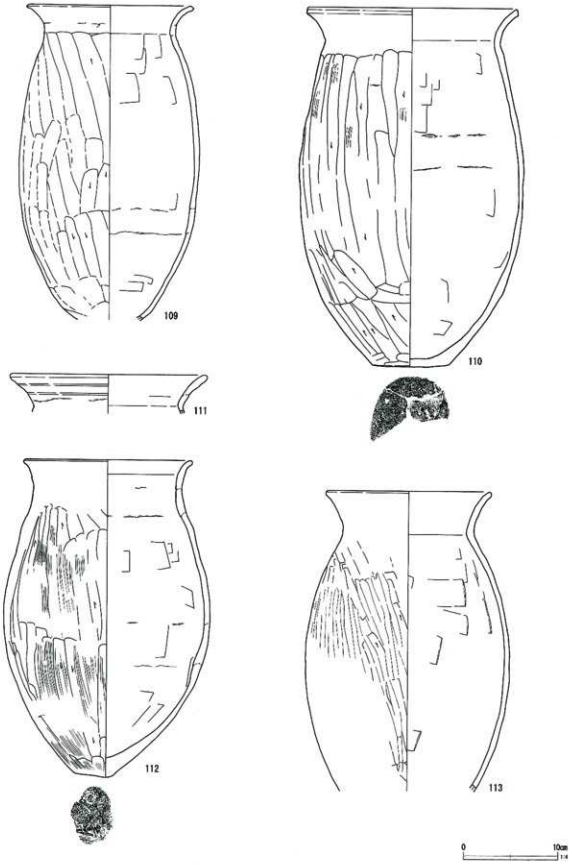
第356図　流路跡出土遺物（7）



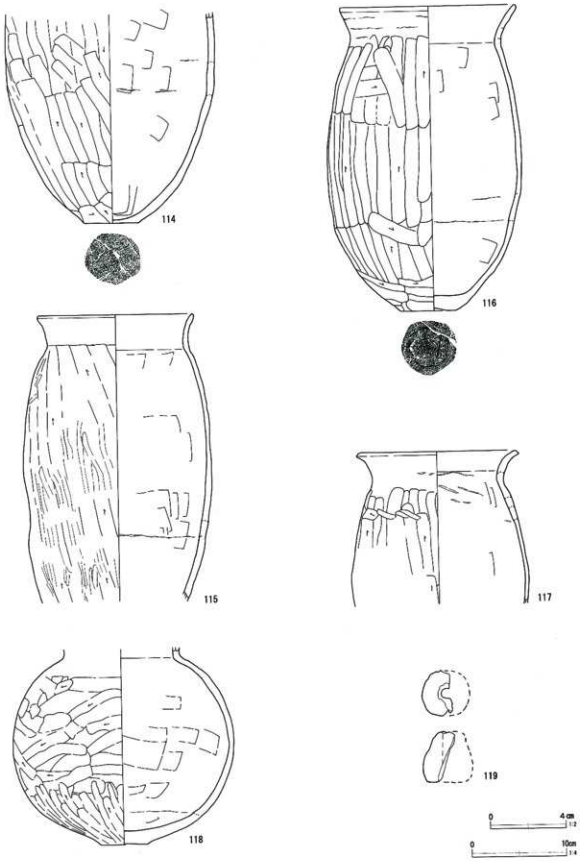
第357図　流路跡出土遺物（8）



第358図　流路跡出土遺物（9）



第359図　流路跡出土遺物（10）



第360図　流路跡出土遺物（11）